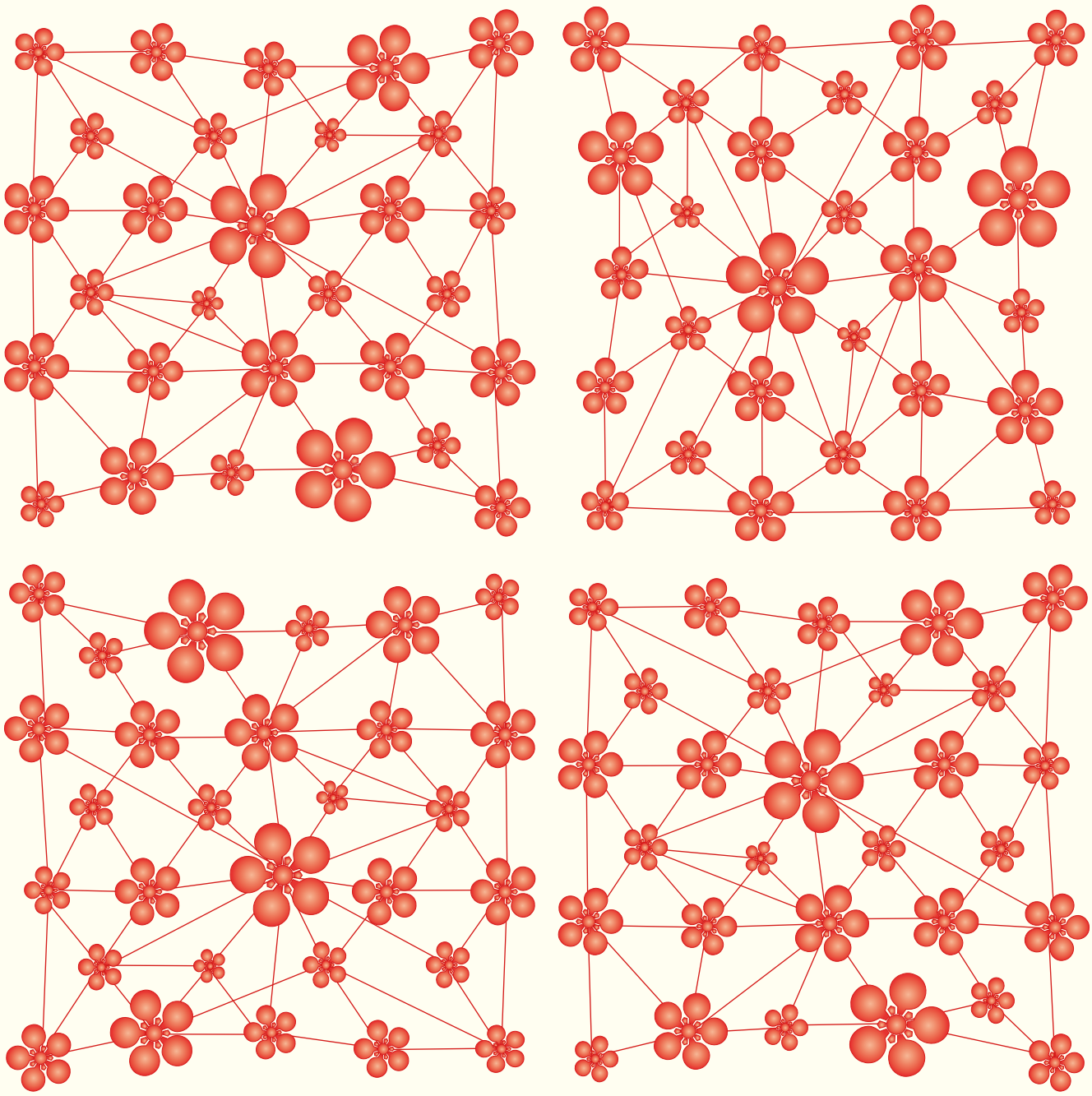
金沢まちづくり市民研究機構 活動記録誌 2003-2012

市民がすすめたまちづくり研究十年の軌跡



金沢まちづくり
市民研究機構
活動記録誌

2003-2012

市民がすすめたまちづくり研究十年の軌跡

目 次

■発刊にあたって　機構長代理 川上 光彦・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

■金沢まちづくり市民研究究機構の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 ～ 5

■ディレクター × 研究員　座談会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 ～ 9

市民によるまちづくり研究機構 ～ 活動を振り返って ～

参加者：歴代ディレクター　　川上光彦、三国千秋

歴代市民研究員　　吉田洋、菅村美知子、大竹滋

■歴代ディレクター寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10 ～ 22

川上光彦、水野一郎、飯島泰裕、横山壽一、黒川威人、
三国千秋、八重澤美知子、真鍋淳朗、髙山純一、
井上克洋、内慶瑞、内田奈芳美、坂本英之

■歴代活動記録と市民研究員寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23 ～ 76

■ディレクター講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

■写真でふりかえる活動の軌跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78 ～ 79

■資料集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

■沿　革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81

■あとがき　編集委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82

表紙について：金沢の象徴といえる「梅鉢」を線で結ぶことで、金沢まちづくり市民研究機構の活動のような市民とのつながりが、まちを美しく・元気にしていくことを表現しました。　表紙デザイン／木和田里美（金沢市在住）

発刊にあたって

金沢まちづくり市民研究機構の取り組みは、全国的にもユニークな取り組みである。市民が自主的に参加し、ディレクターのもとで、それぞれ、都市づくりやまちづくりに関わるテーマについて調査研究し、金沢市や市民に提案する。それらについて、各担当部局が参考にしたり、施策化を検討したりする。また、こうした活動を通じて、参加市民がまちづくりについての理解を深め、市民活動のリーダー的な意識と能力を獲得していくことになる。

大都市においては都市政策についての研究部門を持っているところがある。(財)東京市政調査会(大正11年設立、平成24年4月より公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所)は老舗であり、その他、公益財団法人神戸都市問題研究所(昭和50年設立)、(財)大阪市都市工学情報センター(平成3年設立)、公益財団法人名古屋都市センター(平成3年設立)なども活発に調査研究やまちづくり支援などを行ってきている。こうした専門スタッフを有する研究機関の利点は多いが、設立や運営のために多額の資金等を要し、人事も硬直的になりやすいなどの課題もある。

本研究機構は、既存の自治体研究機関が持つこのような課題を避けることを意図し、機構として専門スタッフを持たないで設立、運営された。したがって、その最も大きな利点は、市民による、市民の生活体験や問題意識にもとづいた、まちづくりへの研究と提言である。報告書などに盛り込まれた成果や提言は、このことを踏まえて的確に評価する必要がある。また、各グループのディレクターとして、地元大学に在籍する教員の経験と学識を巧みに生かした点も良好に運営できた秘訣と思われる。

この度、第9期をもって本研究機構を終えることになった。残念ではあるが、約10年間という節目に、それらの成果を継承しながらも変革していくことは必要なことでもあるといえよう。そこで、これらを踏まえて、今後について二つの提案をしたい。

一つは、本機構が果たした、まちづくりについての調査研究や提言を行う組織や場の継続である。すでに、平成24年より「金沢学生のまち市民交流館」がオープンし活動を開始しているが、別の目的を持って企画されたこともあり、必ずしも継承しているものとは思われない。金沢まちづくりセンター(仮称)の設立を含め、ぜひ検討いただきたい。もう一つは、都市づくりについての専門的に調査研究や提案する組織の検討である。今後は、公民協働や分野によっては市民主体のまちづくりなどを追究、確立していく必要がある。そのためには、そうしたものが欠かせない。ぜひ検討いただきたいと思う。

最後に、本機構の運営に多大な協力をいただいた方々に心から御礼を申し上げます。

平成25年3月

金沢まちづくり市民研究機構／機構長代理

川　上　光　彦

金沢まちづくり市民研究機構の概要

設立趣旨

金沢まちづくり市民研究機構は、金沢世界都市構想および金沢世界都市戦略会議の提言を受け、平成 15 年に設立され、これまで延べ 641 人の市民研究員に参加していただきました。その設立の趣旨は、「金沢を世界都市として、世界のオンリーワンをめざす政策を、金沢に住み、金沢を愛する市民自らの手で調査・研究し、提言しよう」とするものです。

この研究機構は、いわゆるシンクタンクではなく、金沢世界都市構想の実現に向けて、市民主体による金沢の個性豊かで創造的な都市政策を研究し、市政に提言するとともに、市民による自主的な運営を図ることにより、まちづくりのリーダーを育成することを目的としていました。

開設までの経緯

金沢市は、平成 7 年（1995 年）、金沢の総合的な都市づくりの指針として、「金沢世界都市構想」を策定しました。「金沢世界都市構想」は、「住む人一人ひとりの幸せをめざす都市づくり」という都市の内部的目標を重視しつつ、グローバリゼーションをはじめとする 20 世紀から 21 世紀への現代社会の構造変化を見据えて、金沢のあるべき将来像を「小さくとも世界の中で独特の輝きを放つ『世界都市金沢』の形成」に求めました。

しかしながら、金沢を取り巻く外部環境の変動は激しく、金沢の内部においても種々の領域で変化が生まれてきました。そこで、金沢市が「金沢世界都市構想」を実現するための道筋を明らかにする新しい都市戦略、つまり、「金沢世界都市戦略」を構築することになり、金沢内外の有識者からの提言を求めるため、平成 12 年に金沢世界都市戦略会議が組織されました。

この金沢世界都市戦略会議から、平成 13 年、『地域の政治・経済・社会・文化・環境に係わる総合的で歴史的な研究視点を重視し、地域にあった個性的で創造的な政策研究を持続的に進める研究拠点が必要であり、政策研究・研究成果の発信普及・政策研修・人材育成・協力協働関係の形成・政策交流を、産学行民の参加と連携によって推進するための新型地域連携非営利研究組織である「金沢世界都市政策研究機構」（仮称）を創設すべき』という提言を受けました。

その後、開設のための検討期間を経て、平成 15 年 6 月 17 日の設立会議により、「金沢まちづくり市民研究機構」が設立されました。設立会議においては、小掘為雄（当時）金沢学院短期大学学長が、ディレクターの互選により「機構長」に選任されるとともに、組織の運営体制が決定されました。その方針に基づき、第 1 期の市民研究員の募集を経て、同年 9 月 16 日の開講式より、研究活動が開始されました。

市民研究機構の組織

市民研究機構は、都市政策の研究に参加する「市民研究員」及び研究についての指導又は助言を行う学識経験者「ディレクター」によって構成されました。

ディレクターは、本市内及び近郊には、18の大学等の高等教育機関が集積されていることから、この高等教育機関の教員の中で、地域活動に熱意のある方々を市長が委嘱する形で構成されました。さらに、各ディレクターの互選により、市民研究機構を代表する機構長が置かれました。

市民研究グループは研究テーマごとに設置され、ディレクターと市民研究員で構成され、研究員1人あたり年間2万円（参考図書購入等研究活動費）を金沢市が研究委託費として、グループごとに交付していました。

研究を行う分野として、次の5部門があります。

1. まちづくりの新しい総合戦略に関すること
2. 新たな地域経済システムの創出に関すること
3. 教育、文化、福祉等の分野が融合した地域づくりに関すること
4. 自然と人間とが共生する環境にやさしい都市づくりに関すること
5. その他金沢の個性豊かで創造的な都市政策に関すること

市民研究機構には、自主的かつ円滑な運営を行うため「機構会議」を設置しており、ディレクターと市民研究員の代表者で構成されました。ここでは、研究方針・研究内容等、運営に関する事項を検討・決定していました。また、市民研究員を公募し選考・決定していました。（応募は連続4期まで可能）

市（事務局）の役割としては、研究拠点の場の提供（専用室約65m^2、ITインフラ整備）や連絡・調整等の事務的な処理を行っていました。

市民研究員

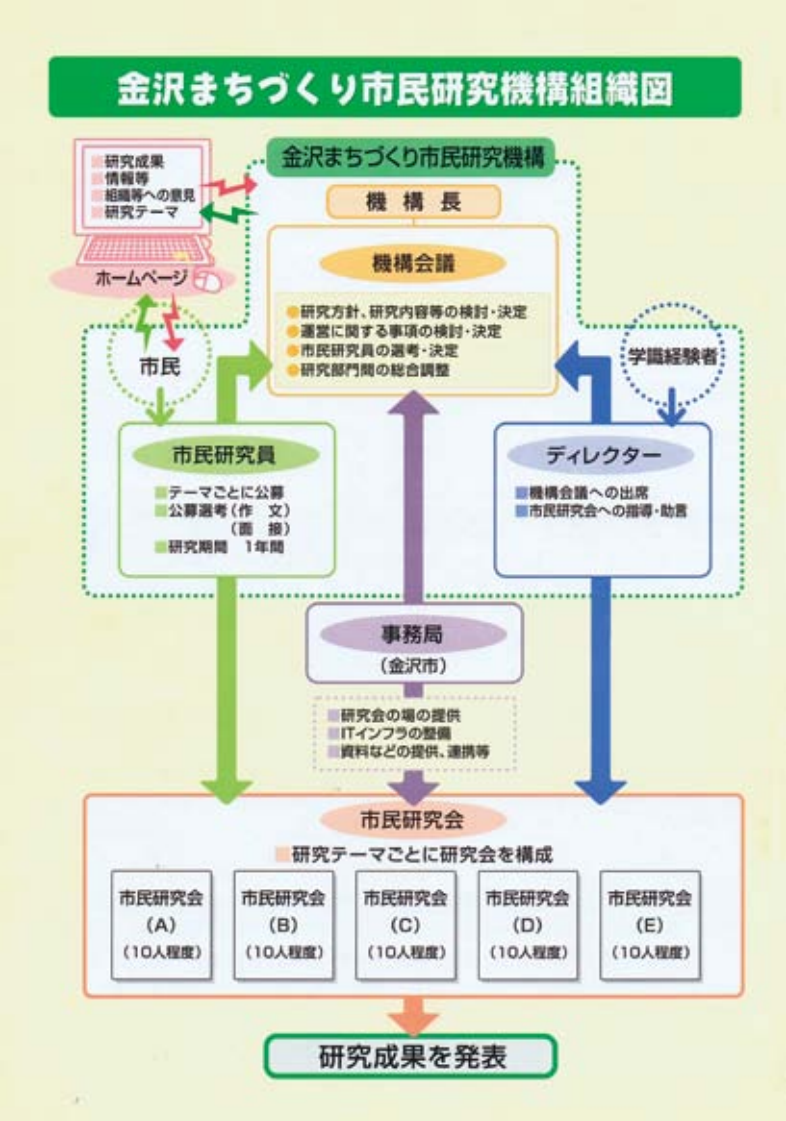
市民研究員は、例年6～7月の1ヶ月の期間に、研究グループごと10名程度を募集しました。応募資格については、下記のとおりでした。

- 金沢市内にお住まいの方、勤務されている方、通学されている方
  （ただし、金沢市に近隣の高等教育機関の学生は在住要件を問わず）
- 年齢18歳以上の方
- 金沢まちづくり市民研究機構の設立趣旨を理解し、研究活動に積極的に参加できる方

つまり、資格や経験は不要で、やる気があれば、どなたでも参加できる仕組みであり、そこがいわゆるシンクタンクとは異なる点で、市民の声を広くまちづくりに活かしていくことを目的としていました。

積極性を判断するために、研究員の応募にあたっては、800字程度の作文が必要であり、当初の登録料（保険料）として、1,000円の負担も必要でした。そのため、応募された研究員の方々は熱意ある方が多く、1年という長い期間を積極的に活動しておられました。

市民研究機構の組織図



■ 機構長

機構を総理・代表する機構長職には、小堀為雄金沢大学名誉教授が、設立時にディレクター互選により就任され、ご逝去される 24 年 4 月まで、職務を務めていただきました。小堀氏は、「金沢世界都市戦略会議」の座長も務められ、機構設立の提言をまとめられた立場から、実際の機構の立ち上げに尽力されました。

機構設立後も、専門の橋梁工学の関連の研究グループを指導されるほか、広くまちづくりに携われた見識を活かして、機構のグループ全般の運営にかかる総括をしていただきました。

小堀為雄　氏
金沢大学名誉教授
金沢学院短期大学名誉学長
【賞歴】
H21 瑞宝中綬章
H4 金沢市文化賞等

■ ディレクター

各グループを指導していただく、ディレクターには、市近隣の高等教育機関の教員方にご就任いただきました。この点で、金沢市は、「加賀は天下の書府」といわれた藩政期からの歴史的系譜よ

り、周辺に多くの高等教育機関が集積する恵まれた環境にあり、多くの教員にご参加いただくことができました。まさに、地域市民を巻き込んだ学官連携事業のモデルとなる取り組みであり、地域と交わる大学等教員が多い金沢だからこそできたシステムである、との評価がありました。

月２回程度という活動の目安はありましたが、各グループの運営は、それぞれの自主性に任されていました。しかし、様々な年齢・職業の方々が集まる市民研究グループにおいては、その分、各人が様々な思いを持って参加してこられています。各ディレクターは、研究員の意見を受け止めた上で、協力して研究をしていくよう方向性を示していただきました。

もちろん、その専門知識による指導をいただくことにより、各グループの報告書の質が保たれていた点も重要であり、まさに、機構で欠かす事のできない役割を果たしていただきました。

■ 研究室

市民研究員の活動のため、市役所の南分室に市民研究機構専用の研究室が設置されました。パソコンの設置、カードキーの貸与などにより、各研究グループ、研究員が、いつでも研究活動を行うことができる体制が整備されていました。部屋の予約はインターネットのグループウェアを使用し、予約することとなっていました。

遠方から通う方には、駐車場使用可能であったことから、仕事が終わる夜の活動が多い各研究員が自主的な活動を行う上で、快適な環境が整備されていました。

■ 市民研究機構のスケジュール

研究期間は１年間（９月～翌８月まで）で、ディレクターの指導・助言を受けて共同で研究を実施していました。研究期間開始後、研究員の皆さんに施策検討の参考にしていただくため、要請があれば、担当課の市職員が研究会に出向き現状の市事業の説明を行ったりもしました。月２回程度、主に夜間に開催される研究会での意見交換や議論、休日のフィールドワークによる情報収集などを通じての研究活動による研究を重ねた後、９月に公開による研究成果発表会や研究成果報告書の提出により、金沢市へ政策提言を行いました。

この政策提言を、事務局から 10 月に関係各課へ報告し、政策に反映できるか検討してもらい、反映できるものは12月に各課で予算要求をして、予算化されたものは、次年度の施策に反映されました。

研究成果の政策への活用や反映されたかどうかについて、予算要求後に関係各課に事務局から照会し、とりまとめた結果を市民研究員の皆さんにお知らせしました。

市民研究機構の流れ

１年目	４月	研究テーマの募集
	６月	募集要項決定、市民研究員募集
	８月	市民研究員選考、決定、市民研究員任命式（講演等開催）
	９月～翌年８月	研究活動を実施（１年間）
２年目	９月	研究成果報告書提出、研究成果発表会開催
	10 月	関係各課へ施策反映の検討を依頼（事務局）
	12 月	関係各課予算要求
	３月	次年度予算に反映

市民によるまちづくり研究機構 ～ 活動を振り返って ～

ディレクター × 研究員 座談会

金沢まちづくり市民研究機構は、2003 年の設立時から足かけ 10 年にわたり、金沢を世界に誇るまちにするため市民の手によって調査、研究が進められてきました。のべ 641 名もの市民が研究に関わり、一人ひとりが仕事や家庭、勉学の一方で、時間を活かして意見交換や議論、フィールドワークを展開してきました。

時代が移り変わる中で、魅力あるまちづくりに向けた研究が展開されたのは、研究機構のグループを指導してきたディレクターと、真摯に調査、研究を重ねた市民の力が原動力でした。

この間の苦労や想い出、学んだことについて、ディレクター、研究員の皆さんが座談会形式で、その模様を振り返りました。

■ 参加したみなさん（敬称略）

川上光彦　機構長代理（金沢大学教授／第 1 ～ 9 期ディレクター）
三国千秋　ディレクター（北陸大学教授／第 1 ～ 9 期ディレクター）
菅村美知子　（自営業／第 3 ～ 6、8 ～ 9 期研究員）
大竹　滋　（国家公務員／第 1 ～ 2、5 ～ 8 期研究員）
吉田　洋　（自営業／第 1 ～ 4、7 ～ 9 期研究員）

写真右端から時計回りに、川上、三国、菅村、大竹、吉田の各氏

■ 立ち上げ当時を振り返って

川上　2001（平成 13）年にまとめられた金沢世界都市構想と金沢世界都市戦略会議の提言の中で、金沢を世界に誇る都市にするために、研究機関を設けるべきである、という提言がありました。行政主導では考えが硬直化するので、柔軟に民間の人材を登用すべきとの意見が出され、市民研究機構を立ち上げる取り組みがスタートしました。故小堀為雄先生（金沢大学名誉教授）、飯島泰裕先生（当時金沢大学助教授）と私が、戦略会議の委員から引き続き準備にあたり、三国先生達にもご参加いただき、初代のディレクターに就きました。その後、ディレクターの互選により、機構長を小堀先生にお願いして、活動が本格化しました。三国先生は、ディレクターの役割について、どう考えられていましたか。

三国　ディレクターへの就任は、金沢市から要請がありました。最初に話をいただいた時に、「引き受ける以上、 1 年間では何も形にできない。せめて 3 年間は任せてほしい」と条件を出させてもらいました。それが気付くと 9 年間。長いような短い 9 年でした。

川上　小堀機構長とディレクター 8 名でスタートしたことが昨日のように思い起こされます。この間、活動の主役となったのはもちろん市民研究員の皆さんです。3 名の皆さんは、どんなきっかけで参加されたのですか。

吉田　佐々木雅幸先生（現大阪市立大学教授）が金沢大学教授を務めていた時から、創造都市の研

究会で川上先生とご一緒していて、先生からお誘いいただいたのがきっかけでした。「明日の金沢の交通を考える市民会議」のメンバーでもあり、研究機構でも主に交通と環境の調査・研究に取り組みました。

菅村　女性起業家のグループを作っていて、活動の中で川上先生からメールをいただいたのがきっかけでした。そんな意味では川上先生に背中を押していただきました。

大竹　図書館でチラシをみたのがきっかけで、第一期から参加しました。ふるさとである金沢に対する思い入れがありました。幕末から明治期には全国有数の都市でありながら人口も減り、まちの活力が停滞しているように感じて、自分が発信するというと大げさですが、市民の立場で何か力になることがないかと思い、参加を決めました。

■ 幅広い参加者とそれぞれの想い

川上　スタートした研究機構は、年齢や職業も幅広い混成チームでした。皆さんグル―プ運営で苦労をされたのではないでしょうか。

三国　第一期のグループは 12 名。いずれも、つわもの揃いで、侃々諤々（かんかんがくがく）の議論を重ねました。皆さん、金沢を愛し、金沢を思っていましたね。テーマは「LRT」。翌 2004 年には、市民研究員を中心に、先進地であった米国オレゴン州ポートランドへ調査・研究に出かけました。宿も予約せず、1 週間、ほとんど観光もせずに、聞き取りや調査に打ち込みました。機構から 1 万円程度の補助を受けて、皆さん自己負担で参加されました。２年目はデンマーク、３年目はドイツへと渡り、メンバーの家族からは「もういい加減にして」という声も上がってきました。皆さん、勤務先の企業や上司が「行って来い」と長期休暇を認めてもらいました。金沢市のために調査・研究しているんだ、という自負や周囲の理解があったんですね。

大竹　当初は個性的な方が多かったですね。私はおとなしい方で小さくなっていました(笑)。しゃべり出したら止まらない方、自分の言いたいことを言ったらそのまま帰ってしまう方。共同作業は大事だなと痛感しました。

吉田　年齢も職業も異なる皆さんと議論を重ねるのは楽しかったですね。時に議論が白熱することも。一緒にグループを運営するうえで、さまざまな意見を受け止めて我慢することを覚えましたね（笑)。

菅村　私の周りは女性も多く、対立するということはありませんでした。八重澤美知子先生がディレクターで、自分でテーマを設定し、自由に意見をいいあうという楽しい雰囲気でした。それだけにかえって個人の研究に対する責任の重さを感じました。

■ 実現に至った提言も多く

川上　活動の成果はいかがでしたか。

三国　第三期に、自転車交通を担当する課を設置するよう提言しました。当初は行政と私たちの考えが一致しませんでしたが、その後、コンセンサ

スを得ることができたと実感しています。まちなかの自転車交通に関しては、市民協働という形で実現できたと思っています。

菅村　「金沢の水道水はおいしい」ということで、金沢の水に対する提言をしました。その後、「金沢の水」として、実際に商品化されており、提言も役に立ったのかなと思いますね。

大竹　いろんな提言や報告が出され、実現したものもありますが、実現されなかったことが多いですね。やはり勉強不足であり、稚拙な提言もあったかなと。それでも市民が行政に参画できる貴重な機会でしたね。あとになってもっと勉強が必要だったなと振り返っています。

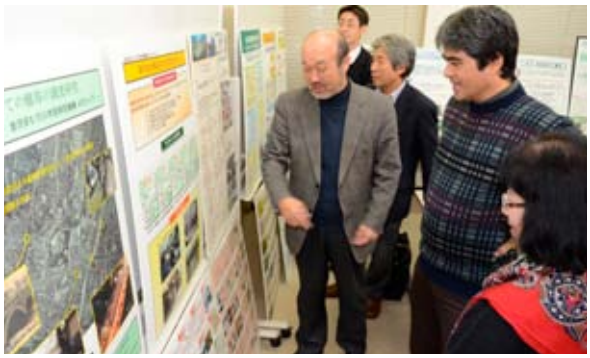
川上　市は課ごとに予算を要求するのがシステムになっています。市民が提言したからといって簡単には事業化することはできません、それでも山出前市長は、「施策に反映できる提言はできるだけ活かす努力をせよ」と職員にも声をかけていました。市も「市民目線のまちづくりリーダー育成の場」ととらまえていたのではないでしょうか。

三国　各期ごとに最後は報告書をまとめます。皆さん、プレッシャーも感じていたようです。私はかなり研究員の原稿に注文をつけました。そうすると文章を書ける方、書けない方が出てきますが、皆さん懸命に頑張って報告書のとりまとめにこぎ着けました。活動をさらに実践したいと、研究員の中からも NPO を立ち上げる方も現れました。ただし、NPO はメンバーが固定されますが、研究機構は毎年メンバーもテーマも変わるという部分で、ユニークな活動につながったと思いますね。

菅村　留学生とのネットワークができたことや、まちづくりをともに考える仲間ができたことは得がたい経験でした。フェイス・トゥ・フェイスでネットワークが広がっていきました。

大竹　生まれ育った金沢ですが、知らないことも多く、機構を通じて知り合った皆さんからいろんなことを教えてもらいました。実家は町家で、古い家だなと思っていましたが、機構を通して改めて価値を見直しました（笑）。

川上　金沢市の市民によるまちづくりに対する取り組みは、機構の活動もあって地方都市ではかなり活発であったように思われますが、今後は、行政が頑張るより、コミュニティカフェなどの取り組みように、市民主体で、議論し、集う場ができたらと思います。市には、ぜひそのきっかけづくりを担ってほしいですね。



大竹　まちづくりは現場からの生活者の声が反映されないとうまくいきません。市職員の方だけでは進まない。プロであるコンサルタント、設計や建設業者だけで進めては利害関係もある。かといって町会とも異なる。いわば中立的なアマチュアの目線で、研究機構の存在意義があったように思います。

吉田　行政への要望や提言は、議員に頼むばかりでなく、市民が進めればいいんだ、自分たちが研

究すればいいんだという自負も芽生えてきました。

三国　研究には時間がかかります。1日や2日で行うイベントではなく、1年2年と時間をかけて腰を据えた取り組みが必要ですね。取り組みを支援するディレクターの人材が豊富なのも、大学が集まる金沢ならではの地の利です。行政には、これからもその利点を生かしていただきたい。

■ 機構の歴史をこれからのまちづくりへ

川上　皆さんの思いが詰まった市民研究機構もいよいよ幕を閉じます。これからの金沢への想いや研究機構について一言感想をいただけますか。

大竹　市民がまちづくりに関して具体的な取り組みや行動をする時期を迎えたのかなとも思います。研究機構を通じた予算措置や活動拠点が研究員にはとてもありがたかったですね。これからもこうしたまちづくりに意欲を持った市民の活動拠点があるとうれしいですね。

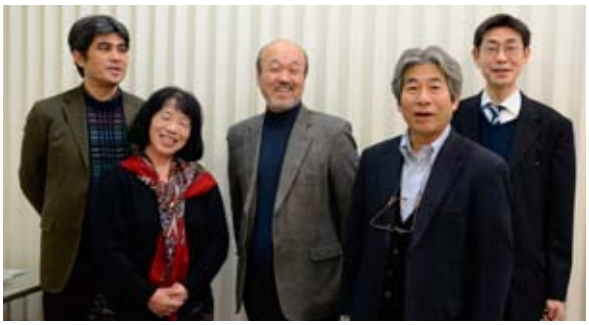
吉田　金沢検定が実施されています。ペーパーテストだけでなく、フィールドワークやワークショップで金沢を探る活動があったらいいなと思います。まちづくりに対する議論が公に交わせる場も大変に貴重でした。教育の流れが変わり、ある世代以上の方々では、目上の方や年長者の意見に従うという意識が強かったように思いますが、若い世代を中心に、議論をするという習慣がさらに広がって行くよう希望します。そんな場が今後も提供され続けて、金沢のまちづくりに関する議論が深まっていってほしいですね。

菅村　大学で研究活動に当たる先生方と私たち市民が一緒に勉強できる場に参加したことは大変貴重な経験でした。研究機構が幕を閉じることは、とても残念ですね。今後も市の施設でこうした大学と市民が一緒に研究できる学びの場ができることを願っています。

三国　いったん社会に出た後で、まちづくりを学びたいという思いを持った方も多く、自分たちの経験を社会に還元したいという思いの方もいる。行政には、今後もこうした人材、熱意、知恵を活かす受け皿を作ってほしいですね。

川上　設立以来、足かけ10年近い時の流れの中で、機構の中からまちづくりのリーダーが育ち、NPOが生まれました。10年前と比べると、市民が行政に対して意見を言い、行政もそれを積極的に採り入れるという時代に変わってきました。これからは、行政と市民がいっそう協働で施策に取り組む時代になると思います。研究機構で培われた知識、提言や人材といったいわば機構の歴史が金沢のまちづくりに活かされていくことを期待して座談会を締めくくらせていただきます。

一同　ありがとうございました。



座談会は2012年11月、金沢市庁舎南分室にあった金沢まちづくり市民研究機構研究室で開催しました。

一連の担当テーマを振り返って

ー市民の参加・主体によるまちづくりー

機構長代理、第１～９期ディレクター
川上　光彦　金沢大学教授

第１期より第９期、つまり、結局、最初から最後までディレクターを担当した。世界都市構想の実現のための戦略会議にも参加し、そこで、私自身も都市づくりを調査研究する組織の提案を行っている。つまり、10年以上の付き合いになる。私の場合は、都市計画を専門としていることもあり、テーマは、都市づくりに関連することで、市民が集う研究会にふさわしいものを検討してきた。そのため、第1、２期は「まちなか再生のためのまちづくり」とし、中心市街地の再生などを切り口に、商業、住宅地、交通分野などに取り組み、とくに特定地区を想定して、下層階に商業機能を持ち、福祉施設も入った中低層の集合住宅を計画し、イメージ図を描いて提案した。

第３、４期は「市民・住民の参加・主体による個性的で豊かなまちづくり」とした。金沢市の都市づくりは、自主条例による取り組みなどで全国的にも先進的であるが、市民が参加・主体という面ではそうは言えない。市民活動のあり方、活動の場づくり、市行政との連携などについて検討し、まちづくりセンター創設なども提案した。

第５、６期は「金沢における地域コミュニティの活性化」とし、従来の町会活動の実態を検証しつつ、それらの活性化のあり方、新たな地縁的な活動の立ち上げなどについて提案した。その中で、増え続けているマンションと近隣住民との交流、コミュニティビジネスの可能性、市行政によるまちづくり協議会などを検討し提案した。

第７、８期においては「子育てにやさしい都市・まちづくり環境の整備推進」とした。わが国の都市づくりは、都市の近代化や幹線道路整備に努めてきたが、必ずしも人にやさしい都市になっているとは言えない。出生率の低下も考慮して、子育てに焦点をあてた。親子づれの協力も得て、実態調査を行ったが、やはり、車中心の都市づくりは、小さな子供づれやベビーカーにはやさしく無いことが実感された。そのため、世代間の交流、公園の見直し、イクメンの推進、まちのベビーカー貸出などを提案した。

第９期は「コミュニティカフェ活動による市民協働のまちづくりの推進」とした。全国的に、新たな出会いや人とのつながり、ふれあいの場としてコミュニティカフェが増え続けている。先進地の視察を行いながら、金沢市においても、コミュニティカフェ的なものもいくつか生まれてきていることがわかった。そのため、金沢市などの活動を紹介する小冊子をつくるとともに、「コミュニティカフェサミット in 金沢」を開催し、そうした活動を行っている人々が集い、交流する場を持った。

以上、都市づくりというより、コミュニティの形成、市民の参加や主体によるまちづくりに関わる内容であった。その中で、いろんな市民の方々とのうれしい出会いがあった。提言が都市づくりに生かされるとともに、参加していただいた方々にとって充実したときを過ごし、その後の少しでも糧になっていることを願っています。

一連の担当テーマを振り返って

アートからのまちづくり

第１期ディレクター
水野　一郎　金沢工業大学副学長

私にとっては平成 16 年の１年間だけのディレクターでしたが、参加された市民と共に創りあげた印象深い研究でした。研究テーマは「アートからのまちづくり」。仲間となった市民研究員は私を含めて７名､60 ～ 70 歳の美術愛好家３名､34 歳の会社員、21 歳のプランナーや学生３名でした。

「アートからのまちづくり」をテーマにした背景

当時 2004 年は 21 世紀美術館オープンを控え、金沢は伝統的な美術界にやってくる現代美術という新しい風に気分昂揚していました。2003 年の越後妻有トリエンナーレ､2004 年のベネチアビエンナーレなどで現代美術が美術館の中だけではなく、まちなかや河川や田畑などに設置され、作品と環境と鑑賞者とが対話した情景が話題になりました。また、札幌、東京、高岡などと同じく、金沢のまちなかにもパブリックアートとして彫刻やインスターレーションが設置され、身近にアートを鑑賞する動きもありました。音楽、演劇、舞踏、パフォーマンスなどのまちなか舞台化もあちこちで起こりました。そういったさまざまな動きを採集し、評価し、さらに活用を考察したいということからテーマが生まれました。

研究方法

３つの方法でアプローチしました。１つはアートとまちに関するトピックを全員で拾い集めました。例えば新聞、雑誌、テレビ、専門誌などの記事を採集し持寄るとか、出身地や居住地界隈での事例報告などの収集を行い、分類・評価をしました。

２つ目は先進地訪問調査。美術館活動や美術のイベントや教育で実績ある倉敷を全員で訪問し、大原美術館の活動と大原氏インタビュー、市民による屏風祭や花七夕、学童の美術教育等の見聞調査をして、アートとまちが連帯している倉敷の成果を実体験しました。３つ目は各研究員が自らアートからのまちづくりについてアイデアや企画を提供することでした。

研究成果

アートとまちづくりに関係するさまざまな種類のシーンが 150 件以上収集されました。それをまず内容別にグルーピングし、各グループに相応しいキャプションをつけ、アートとまちの関係性が各種あることを認識しました。そしてその関係性がアートにとってどういう効果があるのか、まちにとってどういう役割を果たしているのかという意味や価値を探りました。その結果、アートとまちが関わりを深めるほど､成熟社会での生活や環境の質が向上し、思考や美意識を育くみ、生業に活力を与えると結論づけ、その有効性を確認しました。

おわりに

私にとっても初めてのテーマだったので、市民研究員の一人として参加しました。たまたま私事で超多忙の時期と重なったのですが、毎回全員が真剣に取組んでおられたのに励まされ終了できました。最終的に内容ある 56 頁の報告書を完成させたことを心から喜ぶと共に研究員の皆さんに感謝致しております。そして私自身、その内容の実現に微力ながら努力を続けていることも併せて報告します。

一連の担当テーマを振り返って

市民のアイデアと行動力に感激した市民研究機構

第１～６期ディレクター
飯島　泰裕　青山学院大学教授

この度、平成 15 年の設立から第 9 期の研究活動をもって終了するとのお話を伺い、感慨深く昔を思い起こしました。この金沢まちづくり市民研究機構は、金沢を世界的魅力のある街にしようという「世界都市戦略」に基づいて、市民のアイデアや行動力を政策へ取り込むことを意図して、設立されたものだったかと記憶しています。

当初は、行政に関して全く素人な市民を、政策立案の現場へ取り込もうという、ある意味大胆なものと思っていました。そのため、市の関係者を巻き込んだり、政策を勉強している大学生、大学院生を巻き込んだりしました。また、アイデア発想法やプレゼンテーション技法の勉強会を仕組み、金沢大学や文科省の地域連携プログラムの協力を得たりしたかと思います。市民の皆さんも最初は、日頃感じていることを述べるだけだったものが、調べ、見学し、関係者から話を聞き、グループワークでアイデアを出し、プレゼンテーションし、議論していくうちに、完成度の高い政策を提案し、試行的活動に取り組んだ方もいらっしゃいました。

自分は、ICT（情報通信技術）分野からの参加でしたので、ホームページの高度化や携帯電話のモラル向上、ICT による市民生活の向上、産業や観光ビジネスの高度化などをテーマに、第 1 期から第 6 期までのディレクターを務めさせて頂きました。中でも、「モバイル解剖プロジェクト」は記憶に残る活動でした。これは、情報社会に生きていく子供たちに、今や欠かせなくなった携帯電話のしくみを理解してもらい、マナーも楽しみながら学んでもらおう！という趣旨で行ったものでした。実際に携帯電話を分解して、細かい部品の役割を確認し理解を深めていく体験型で、楽しみながらモラルやマナーに対する意識の向上を促したものでした。7 歳から 59 歳の 43 名の参加があり、子どもだけでなく、大人にも携帯電話のモラルやマナーを再認識して頂いたものでした。実施に際しては、教育関係者の協力の他、電波機器の分解含むため、総務省や携帯通信事業者、メーカーにも協力を頂きながら進めることとなり、多くの方の協働で実現したものでした。

世界では、スウェーデンをはじめに、オランダ、イギリス、フィンランド、イタリアなどが、「フーチャーセンター」なるものを始動させています。これは、知的資本経営を背景に、「十数年後の社会の姿を具体的に描き出す」未来シナリオ作りから、新しい公私協働の政策を作り出すものです。ここでは創造性と直感力が重要で、公私協働で実施し、常にその活動は市民に公開されており、オランダの国税庁のシップヤードや治水交通省の LEF が成功例として紹介されています。金沢まちづくり市民研究機構は、この原点になるものと感じます。

金沢市は全国に先駆けて、facebook や twitter などの SNS を使った情報発信を成功させており、市役所側からの公私協働の働きかけとも言えます。新たな市長のもと、単なる市民の政策勉強会ではなく、地域の力となる新たな公私協働の展開に期待し、益々の金沢の発展と繁栄をお祈りしております。

一連の担当テーマを振り返って

まちづくり市民研究機構
市民参加の壮大な実験としての市民研究機構

第１～６期ディレクター
横山　壽一　金沢大学教授

私は、機構の立ち上げ準備の段階から関わり、第６期までディレクターを担当させていただきました。私が担当したグループでは、金沢市における地域福祉のあり方について調査研究し、政策提言をまとめてきました。

研究員の方々は、じつに個性的かつ魅力的な方々ばかりで、皆さんと出会えて議論できたこと、何よりも、実際に生活上の困難を抱え必死になって生きてこられた人たちの生の声を聴き一緒に考える機会がもてたことは、福祉の研究者として、また一市民として、何物にも代えがたい財産です。あらためて感謝します。

グループが提言としてまとめた項目は、６年間で100項目近くになります。ただし、実際に政策として具体化されたり、何らかの形で反映されたものはわずかしかありません。その意味では、十分に役割を果たせたとは言えませんが、どの項目にも研究員の皆さんの切実な願いや熱い思いが込められており、金沢市の地域福祉の発展にとっては今でも欠かせないものばかりであると確信しています。

苦労して提言をまとめても取り上げられず、検討の対象にすらならない、納得できる説明もない現実を前に、研究員とともに悔しがったり愚痴をこぼし合ったこともありました。研究機構のあり方や金沢市の姿勢に疑問を感じ意見を述べたこともありました。そのつど丁寧なやり取りがありましたから、気を取り直してあらためて前向きに取り組んでくることができましたが、市民が市の政策に実際に関与することの難しさ、ハードルの高さを実感するところとなりました。

とりわけ地域福祉の領域は、総論として推進することに市と市民の間に姿勢の違いはありませんが、高齢者の福祉施設の整備をどう進めるのか、障害のある人の雇用に市としてどこまで責任を果たすのか、生活保護の利用をどうすべきかなど、具体的な問題となると市と市民の間には大きな隔たりがあることも少なくなく、時として激しく対立しあうことさえあります。そうした難しい課題は避けて、市にとって抵抗感のない課題を注意深く選んで検討することも可能でしょうが、そうして成果を挙げることにどこまで意味があるのか疑問です。ましてや、市が設定したテーマだけを対象にすることなど論外です。

研究機構は、いろんな意味で政策への市民参加をめぐる壮大な実験の場であったとも言えます。その実験に関われたことに感謝します。退いて以降の状況は理解していませんが、少なくとも関わっていた時期までの実感からすると、様々な可能性を導き出してはきたものの、なお多くの検討の余地を残した道半ばの実験であったように思います。政策として採用されるためには提言の精度を高めなければなりませんし、提言を市民の声として真剣に受け止めるならば、耳の痛いことも含めて提言への向き合い方に市も熟達する必要があります。研究機構が閉じても、市と市民の間でこの課題は生き続けます。

一連の担当テーマを振り返って

「金箔による街づくり」は今

第１～２期ディレクター
黒川　威人　金沢美術工芸大学名誉教授

私がディレクターを務めたのは 2003 ～ 4 年の 2 年間である。5 年度は金沢美大の定年退官を翌年に控え多忙であったところから、若手教授に引き継いでもらった。遡る 2002 年から、私は学生たちとともに金沢箔青年会との協同で「金沢箔」の振興を目的とした様々なプロジェクトに取り組んでいた。金沢箔は全国のほとんど９９パーセントを生産している、地名の由来がそもそも「金」に関わりがある。にもかかわらず地元金沢の街を歩いていて、それを感じられるシーンはあまりない。これが例えば、香川県丸亀市ならば、町中の至る所で「さぬきうどん」の看板を見るだろう。地元では「電柱の数よりうどん屋の方が多い」と胸を張る。金沢でこれに類する話としては「天から謡が降ってくる」が挙げられるだろうか。これは植木職人といえども謡などの芸能を嗜んでいることを示すものだというが、今日ではほとんど聞かなくなった。伝統工芸は今も盛んだが、町中でそれを目にすることは少ない。かろうじて浅野川での友禅流しが挙げられるだろうか。それにしてもそうしたチャンスはまれである。そこで、私の専門領域である環境デザインで、このまちを日本一の金箔生産地にふさわしい街へとデザインできないか、というのが狙いであった。

前年度からの青年会とのコラボレーションでは、既に様々なアイディアが生まれており、いかにしてこれを実際の町づくりに取り込んで行くかが明確な目標としてあった。こうした背景のもと、青年会のメンバーを中心に、金沢美大の大学院生と一般から応募の市民によって精力的に取り組まれることとなったのである。

結果の詳細は成果報告書にあるので割愛するが、ここでは活動がその後金沢市政や金沢の町づくりにどの程度浸透したのかを見てみたい。

町中で金箔を目にする機会を増やそうとの狙いでは、町中の老舗の看板や公的サイン類をできるだけ金箔にしようと計画し、その第一号が市役所と知事公舎の間の総構え堀にかかる「宮内橋」の親柱であった。橋名板を取り付けて欲しいという地元の要求にからめ、当時の山出市長に直接お願いし実現したものである。青戸室石に書を彫り込み、文字部分は青年会メンバーが箔押しをしたが、今もって金箔の輝きは失われていない。ただ JR 金沢駅のマークを全国統一の青色ではなく金箔になど、拠点への金箔サインの導入は未だしの感がある。

大きなテーマとしては、金箔に関するあらゆる情報や研究活動を一本化し、それまで駅西にあった安江金箔工芸館と一体的に金沢箔復興のゆかりの地である東山界隈に移築してセンター的な役割にしようという提案は、一昨年、金沢箔技術振興研究所と一体となって東山に完成し今日に至っている。ただ、その内容は、我々が考えたような、箔に関するあらゆる業界、職人、芸術家、学者、デザイナーを巻き込むような存在になっているかという点で、まだまだ遠いものがあると当時のメンバー達は感じているようだ。

一連の担当テーマを振り返って

行政・市民・事業者協働の「まちづくり」

第１～９期ディレクター
三国　千秋　北陸大学教授

９年間、金沢まちづくり市民研究機構・環境部会のディレクターをさせていただきました。懐かしい思い出はたくさんあります。研究機構のメンバーと海外視察に行ったこと、2004 年アメリカのポートランド（テーマ：交通と LRT）、05 年デンマーク（自然エネルギー）、06 年 10 月ドイツ（自転車交通）、11 月韓国（「石川青年の翼」との共同事業：ソウル清渓川再開発と日韓自転車シンポジウム）は良い思い出です。

中でも一番驚いたのはデンマークで、二月の気温は日中でもマイナス５度だというのに、朝の通勤で大勢の人々が自転車で走っていることでした。その時、春から夏にかけてデンマーク全土で実施されている自転車プロジェクトを知り、06 年から金沢でも「ストップ地球温暖化、自転車で通勤・通学・お買い物」を目標にエコサイクル・プロジェクト（二ヶ月間）を６年間実施してきました。この事業には金沢市をはじめ、国や県、地元の企業、観光協会にも後援、協賛していただきました。

2005 年２月　デンマーク・コペンハーゲンにて

金沢市への提言から生まれた成果としては、市に自転車担当課が設置されたことで、実現には３年かかりました。研究を継続して良かったと思っています。再生可能エネルギーの分野では、研究機構のコアメンバーを中心に NPO を設立し、北海道の NPO と共同で輪島市門前町に市民出資の風力発電を実現しました。

とはいえ、研究機構の活動を通じて得られた最大の成果は、まちづくりの分野で行政・市民・事業者の協働という視点だと思います。一例を挙げると、07 年から金沢市内には自転車が走る位置を明示した自転車走行指導帯や自転車レーンが設置されていきますが、それには国・県・市・警察、地元住民や NPO による協働や連携が基になっています。2012 年 10 月全国自転車利用環境向上会議（全国自転車サミット）を金沢市が初めて開催しましたが、ここでも行政と市民、高校などの関係者との協働を紹介させていただきました。金沢まちづくり市民研究機構は今年で幕を閉じますが、環境分野での活動は今後も続けていきたいと考えています。最後に、一緒に活動していただいた歴代の研究員のみなさま、市役所はじめお世話になった関係者の方々に心から御礼申し上げます。

一連の担当テーマを振り返って

金沢を学ぶ・金沢で学ぶ・金沢から学ぶ ～金沢文化、多文化共生、そしてクールジャパンの発信～

第３～９期ディレクター
八重澤　美知子　金沢大学教授

金沢で暮らし、金沢を愛する市民の調査・研究により、金沢を世界で最も良い都市にするための提言を行う「金沢まちづくり市民研究機構」に、３期からディレクターとして参加させていただくことになりました。終了する９期までの７年間で取り組む事となったテーマは、大きく３つあります。「金沢文化」や「異文化交流と多文化共生」そして「クールジャパンと金沢の発信」がそれです。これらのテーマには、多くの多彩な研究員の参加がありました。このグループの活動を特徴付けたのは、研究員のメンバー構成と課題に対するアプローチであり、それらは下記の３点にまとめる事が出来ます。

第１に、10 代から 80 代までのさまざまな年代が集まりました。

世代を超えた話し合いを一言でまとめると、毎回発見があることでしょう。若い世代が驚きを持って聞く事に、語る側の成熟世代は、若い世代が知らない事に逆に驚いたりと、知恵と知識と経験の共有こそが貴重な財産である事を改めて確認しました。また、せっかく金沢に転勤になったので、このチャンスを生かし金沢を知りたいと言う、期限付きでの転勤族の参加もありました。

次に、日本人以外の参加がありました。

海外から来て金沢で暮らす留学生や、国際家族となった市民が参加しました。出身国は、中国、カナダ、メキシコなどで、留学生として、また日本人と結婚して金沢で暮らす人々等です。従って、話し合いでの使用言語は、日本語と英語、また報告書にも、アルファベットが登場することとなりました。

第３に、さまざまなアプローチによる情報の収集を上げる事が出来ます。

フィールドワークをはじめ、研究員自身がボランティアの一員として外国籍市民をサポートしつつ検討するアクションリサーチ、さらに市の最前線で活躍する方々へのインタビュー等も行いました。また、毎回、関連する事項の新聞記事の切り抜きの配布や、旅先からパンフレットを持ち帰って解説する調査研究もありました。

これらに加えて、数名の若い世代の研究員は、海外でデータを収集し、メールで送ってきました。金沢市の友好都市である蘇州市（中国）とオリンピック開催中の北京市の様子、アイルランドでの 3.11 の追悼イベント、ニューヨークでの研修をはじめ、ハワイ、リトアニア、イギリス、メキシコとその行動力と発信力には、成熟世代一同、驚きや頼もしさを感じた事も事実です。このような若い世代の海外体験は、「金沢」と「金沢文化」そして「日本」を外から眺める良い機会を提供し、映像付きの話題提供時は、いつにも増して活発な意見交換がありました。

こうした３点の特徴に共通するキーワードは多様性です。これこそ、市民研究機構が数年間、調査・研究を進める原動力となった言葉だと思っています。

９期を最後に、金沢まちづくり市民研究機構は、その役割を終了します。しかし、金沢の市民協働によるまちづくりの考えを受け継ぐ都市が現われ、私たちを喜ばせる事となりました。長岡市（新潟県）は、来年度から私たちのような組織をスタートさせる予定です。

小堀為雄機構長は、「橋」を対象とする研究者でした。小堀先生は文字通り、広く国内外に、そして次世代に、多くの「かけはし」を用意してくださったのだと感謝しつつ思い出しています。

一連の担当テーマを振り返って

アートによるまちづくりの意義と実践

第３～８期ディレクター
真鍋　淳朗　金沢美術工芸大学教授

３期から８期までの６年間に渡りアート部門のディレクターを担当させていただきました。金沢まちづくり市民研究機構の中で行った活動について時系列で振り返ります。

３期では、アートは全ての分野において、創造性を高めると同時に、様々な分野を繋げる接着剤となりうるばかりか、その地域の特性を具現化し、また世界共通の言語となりうることから、アートによるコミュニケーションを「アートコミュニケーション」と定義し、それを具現化するためのオルタナティブスペースとアート NPO の研究を行いました。

４期では、３期で行った研究をさらに深めるため、全国のオルタナティブスペースを視察しました。オルタナティブスペースの多くは学校や病院、工場、倉庫、銀行として使われていた建物が、その記憶を残しつつ、新たな創造の場として再利用されたスペースです。その在り方自体が「創造的な都市の再生」、すなわち都市の培ってきた歴史を包みこんだ上で、有機的に変容する在り方のシンボルとして地域の中で機能していました。運営組織としては民間自立型、行政と民間財団の連携型、アート NPO・任意団体運営型、行政運営型があります。国内はもとより海外でもオルタナティブスペースを地域再生に活かした成功例が近年数多く報告されています。

５期では、インターネットにおけるコミュニケーションの可能性を探りました。過去２年間に渡り、金沢のアート情報発信について継続的に研究してきた成果を踏まえて、実際にネットワーキングサイト「金沢アートグミ」を立ち上げ、試験的に運用を開始しました。

６期では、アナログの紙媒体を使った「金沢アートマップ」とデジタルのウェブマップ「金沢迷路マップ」を製作しました。市民がより自らの住むまちを知り、金沢を愛し、その魅力を「地図」として発信して行くために、行政によるマップを発行する仕組み作りと、どのような呼びかけが市民に対して必要であるかを提案しました。

７期では、金沢２１世紀美術館が開催した「金沢アートプラットホーム 2008」を研究・分析して、地域キュレーター、行政、美術館、アーティスト、NPO による実行委員会形式による地域型アートプロジェクトの提案を行いました。

８期では、金沢市中心部の空家（町屋を含む）、空店舗における国内外の若いアーティスト・工芸作家が集い、競い合い、発表できるアトリエ等の滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）施設としての活用策について検討を行い、アートによるまちなかの創造ネットワークの形成を研究し、その都市再生の効果を検証しました。

６年間に渡る研究の成果として、本機構の研究員が中心となって作られた NPO 法人「金沢アートグミ」が運営するギャラリーが金沢の中心地に生まれ、本研究の中で課題となっている各テーマの具現化に向けたセンター機能を果たしており、金沢まちづくり市民研究機構の存在意義は大きかったことをあらためて実感しています。

一連の担当テーマを振り返って

５年間務めたディレクターを振り返って

第５～９期ディレクター
髙山　純一　金沢大学教授

小生は、金沢まちづくり市民研究機構のディレクターを平成 19 年９月から５期、務めたことになる。今から思うと長いようで、あっという間に過ぎ去った５年間である。G グループの研究テーマは、「脱マイカー社会の実現」、すなわち歩行者と公共交通に優しい、クルマに頼らない社会を実現するために、われわれはどのようなことをしなければならないのか。地方都市において、そのようなことは可能なのか。ディレクターを引き受けた当初から、この難題にチャレンジして、研究員のみんなと喧々諤々の議論を交わしてきた。今から思うとその議論が懐かしく感じられる。

まちづくり市民研究機構の面白いところは、集まったメンバーが設定された研究テーマについて、１年間、自由に調査研究を行い、その成果を成果報告書（金沢市への政策提言）としてまとめると同時に、研究成果報告会で発表するというところにある。年齢もバラバラ、職業もバラバラ、そのようなメンバーが月２回、まちづくり研究室（金沢市役所南分室１F）に集まって、作業をしたり、議論をしたりする。ディレクター１年目の第５期（５G グループ）のメンバーは、個性的なメンバーが多かったこともあり、議論がなかなか集約せず、成果報告書の取りまとめに苦労したことを、今でも鮮烈に覚えている。非常に印象的なグループであったと思う。また、調査研究の一環として、富山ライトレールやのと鉄道、えちぜん鉄道などの視察・ヒアリングも行った。予算の関係で、遠くへ行くことはできなかったが、視察旅行も研究活動の一環であり、楽しみの一つでもあった。

残念ながら、金沢まちづくり市民研究機構も９期で終わることとなったが、これまで行ってきた金沢市への政策提言の中には、すでに具体的な政策として取り上げられたものも多い。この市民研究機構が果たしてきた役割は、非常に大きいと思っている。これまでの研究成果が、これからの金沢市のまちづくりに活かされることを期待したい。

一連の担当テーマを振り返って

まちづくりと人づくり～小堀機構長が遺したもの

第７～９期ディレクター
井上　克洋　金城大学短期大学部講師

18 世紀のイギリス社会では、医療や年金といった福祉は各地域の教会を中心とした教区と呼ばれる組織が担っていた。教区民の中から福祉の責任者である貧民監督役が複数名選ばれ、教区民の意向を諮りながら運営していたのである。この仕組みを定めた法律が 1601 年に制定されたエリザベス救貧法であり、私の専門である。

機構には、第 4 ～ 6 期の間研究員として、そして第 7 期から今期までは金沢大学の飯島泰裕先生（現青山学院大学）の後任ディレクターとして参加させて戴いた。たまには専門以外の知的刺激を受けるのも悪くないだろうと、大学のゼミナールを受講する程度の軽い気持ちで機構に応募したのが参加のきっかけである。しかし、研究活動を続けていくうちに、市民の有志がまちのあるべき姿を提案するという機構のあり方と、一教区民の貧民監督役が福祉の施策を提案し教区会がそれに予算をつけていく 18 世紀イギリス社会の仕組みとが非常に類似していることに気がついた。研究室で紐解いていた古文書の記録と全く同じ議論が、時代と空間を越えて南分室で展開されるということも何度か経験した。こうして機構の魅力にとり憑かれた私は、イギリスの議会制民主主義の根源がエリザベス救貧法にあったという学説に共感しつつ、ここで 6 年間もお世話になることになるのである。

古文書の中の議論が喧喧諤諤であったように、実際の研究活動の運営も一筋縄でいくものではかった。研究員は海千山千の社会経験をもった個性豊かな方々（ばかり）。議論が暗礁に乗り上げたり、説明のつかない想定外の調査結果が出てきたり、批判的に読んできたはずの行政報告書に逆に説得されてしまったりと、若輩者のディレクターの問題解決能力を超える事態は頻発し、道を示すことが仕事のディレクターが真っ先に迷子になってしまうことも多々あった。そのたびに、緊迫した空気を和らげ、意外な方法で解決方法を見つけ出し、これまでに築き上げてきた人脈をフル活動して難局を乗り越えていった研究員の方々の知恵に舌を巻いたものである。

金沢まちづくり市民研究機構が、長期にわたり存続した意義は大きい。研究員の多くは 1 年の経験を通して社会問題に対する姿勢を大きく変える。研究が開始される 9 月には最初に結論ありきの議論が多かったが、主張をぶつけあううちに多様な意見を受け入れ、安易に結論を出さず、粘り強く解決の糸口を皆で探していくという姿勢が徐々に定着していくのである。機構が残した功績は数多くあるが、こういった研究員を数多く輩出できたことこそが、機構の最大の遺産であると私は確信している。都市の魅力の源泉がそこに住む人々にあるのであれば、人づくりこそがまちづくりの基本となるからである。リベラルで前向きな機構卒業生の方々は、金沢の質や魅力を今後一層高めていく原動力となるに違いない。小堀機構長の真意は、ここにあったのではなかろうか。

一連の担当テーマを振り返って

研究員と共に歩んだＥグループ

第８～９期ディレクター
内　慶瑞　金城大学准教授

2011 ～ 2012 年度の２か年にわたり、金沢市民まちづくり研究機構に携わる機会を与えていただいたことに、金沢市をはじめとする関係各位にまずもって感謝申し上げたい。

福祉領域を担当するグループは、2010 年度には設けられていなかったが、翌 2011 年度より「福祉でつくる安心できるまちの在り方」を主題に掲げ、再度起ち上げられた。しかし、公募はしたものの応募者は思いのほか少なく、そこで故小堀為雄機構長より、その道の一流である福祉・健康領域の関係者をお誘いいただくなどのご高配を賜った。これにより、素晴らしい研究員による８Ｅグループがスタートできたのである。改めて故小堀機構長に感謝申し上げたい。

さて、初 (2011) 年度の８Ｅグループの研究員は、吉田正俊（町会長）・相良多喜子（金沢学院短大教授）・川上芳雄（前福祉施設職員）・奥村佳代（第三善隣館職員）・中島弘晶（金城大学生）・高瀬直己（金城大学生）（敬称略）の６名であった。しかし、吉田氏のみが本研究機構の経験者で、残りの５名は初めて関わるという点でいささかの心配もあったが、そのような心配をよそに毎回熱心に闊達に話し合いがなされた。

なかでも、第三善隣館（味噌蔵町）や加賀野地区社会福祉協議会（白山市）を視察したことは、貴重な学びの機会となった。さらに、県内の大学生を対象に、福祉教育に関する比較的大規模な調査を実施し、夜遅くまで議論を重ねたことも想い出深い。

このようにして、研究報告書やポスター、プレゼン資料を作成し、どうにか研究のアウトプットまで辿り着けたのも、研究員全員の努力によるものであり、改めて感謝申し上げたい。

2011 年９月を迎えて「９Ｅグループ」として再出発を切った２年目、研究員は、松井繁（元盲学校非常勤教員）・奥村佳代（第三善隣館職員）・水野奈央子（金沢大学生）・小島万莉菜（金城大学生）・折池紗綾（金城大学生）（敬称略）の５名による構成となった。うち、奥村氏と私が継続して関わり、両名はワンクールを経験しているので、月２回の研究会も順調にかつ和やかな雰囲気で進めることができた。また、全員がほぼ欠かすことなく月２回の研究会に参加されたことも特筆すべきことであろう。この研究会は、第三善隣館で行ったが、便宜を図っていただいた奥村氏に深謝申し上げたい。

研究活動としては、災害時における在日外国人の支援策を学ぶために、全員で大阪国際交流センターに視察に行ったことが思い出深い。鶴橋で本場の焼肉とキムチ、タコ焼きやお好み焼きを美味しくいただいたことも楽しい思い出となった。

本年８月末を持って、本機構が発展的解散されることは忍びないが、我々の研究成果が金沢市の安心・寄り添える福祉のまちづくり政策の一助となることを期待申し上げたい。

一連の担当テーマを振り返って

多様な公共性を生み出す仕組みとしての市民機構

第９期ディレクター
内田　奈芳美　金沢工業大学講師

金沢まちづくり市民機構のディレクターは１期で終わってしまいましたが、終わってみて改めて可能性がある仕組みだったと感じています。私がディレクターをやっていた短い間にも韓国の水原市のまちづくりセンターから、「ぜひこの仕組みを学びたい！」という一団がやってきました。彼らは金沢のこの市民主体の仕組みを学び、今後のまちづくりに反映していくことでしょう。海外にも評判が伝わっていたという、それだけ優れた仕組みだったということです。

この市民機構のユニークな点として、まず、１年間継続させた活動だということがあります。市民参加の仕組みは多くありますが、この継続性は他には無いものです。研究員は月に１～２度は夜のミーティングに参加しなくてはならず、最後には報告書をまとめるということで、粘り強さと忍耐力が相当必要になります。にも関わらず、みなさん熱心に参加されていたという事実は、金沢市の市民の意欲の高さを示すものです。

また、私がディレクターをやっていたグループでは年齢の幅が相当ありました。このような多様な世代が、一つのテーマのもとに集まるというのも、市民機構の特性だと思います。新しい創造性は多様性無しには生まれません。常に同じ世代の同じ性別の、同じ属性の人々が既得権益のようにまちづくり政策を答申するようでは、新しいアイディアは生まれてこないのです。そういった意味で、多様な人々の活躍する場を生み出したという点が、優れた仕組みであったと思います。私自身も、研究員の方々から出てきた意外な視点に驚かされたりしました。

欲を言えば、テーマにまつわる市担当部局との連携を強化できればもっと良かったかとも思います。近年の提案型まちづくりの制度では、市民から提案されたまちづくりのアイディアと関連する市の担当部局と提案した市民間のマッチングを行う事例も増えてきています。そうすることで、結果的に市民が部局間の横つなぎを行うことになり、さらに多角的な視点からのまちづくりが可能になるかと思います。

最後になりますが、金沢市の担当の方々、長年ディレクターを務めてこられた先生方、及び多くの研究員のみなさま、大変お疲れ様でした。出てきたアイディアの中には実現可能なものもあれば、もしかするとずっと先になって何かの形で実現されるものもあるかもしれません。また、中には市民自らが行うべきアイディアも少なくなかったかと思います。都市の中で誰が公共的な役割を担うのかといえば、決して自治体だけがその役割を担っていくわけではありません。多様な主体の、多様な公共性が金沢市らしさを創り上げていくと思いますし、平凡な地方都市にならないような支援制度をこれからも継続されていくことを望みます。

一連の担当テーマを振り返って

市民研究機構での活動

第９期ディレクター
坂本　英之　金沢美術工芸大学教授

金沢まちづくり市民研究機構に第９期Ｆ（９Ｆ）グループのディレクターとして参加させていただきました。１年間という短い期間でしたが、グループ内の市民有志の方々と「アートによる都市コミュニティの再生」を研究テーマに掲げて活動しました。

９Ｆグループは、各種文献を分類・整理し、金沢市内のまちなかの関連施設を訪ねて調査し、また、先進事例として京都市における市民活動としてのアートによるまちづくりとそれを支える行政の取り組みについての視察などを加え、議論を重ねてきました。完成した報告書では、それらアートを代表とする文化活動により、まちなかのコミュニティを活性化させる可能性を示唆することができたのではないかと思います。

越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭など資金を投入して行う大々的な催しから、NPO などの市民の小さな集団により主導され、持続可能性を模索しながら行われているプロジェクトまで、近年の多くの事例を見ても、アートや文化活動が都市の個性化やコミュニティの維持・継承に欠かせない存在となっています。市民の創造性を触発し、内在しているエネルギーの発露としての活動は、まちづくりにはなくてはならないといえます。

いずれにせよ、市民研究機構で掲げたテーマは、一年間では時間が足りないのは明らかです。もう少し時間をいただけたらとの思いはありますが、市に対しては、これからも、このような市民の内発的な活動が継続していく場、または市民の「思い」を受ける受け皿を数多く用意していただければと思います。

最後になりますが、本研究にご支援、ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。とくに 9F のメンバーの皆さまには、仕事に、家庭に責任ある立場の方々ばかりでしたが、夜遅くまでのディスカッションや泊まりがけの調査旅行、そして原稿執筆など、ご尽力いただきました。心よりお礼申し上げます。

京都「景観まちづくりセンター」取材

「機構研究室」での意見交換

金沢まちづくり市民研究機構歴代活動記録

Contents

第１期・・・・・・・・・・24-29

第２期・・・・・・・・・・30-35

第３期・・・・・・・・・・36-41

第４期・・・・・・・・・・42-46

第５期・・・・・・・・・・47-52

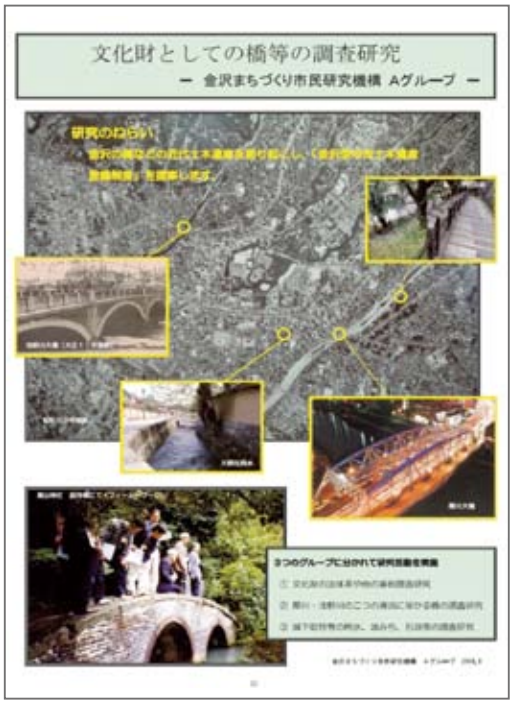
第６期・・・・・・・・・・53-58

第７期・・・・・・・・・・59-63

第８期・・・・・・・・・・64-69

第９期・・・・・・・・・・70-76

文化財としての橋等の調査研究



ディレクター：小堀　為雄

研究員

・室　　穣　・安達　　實　・野村　尚樹

・冨井　康博　・越崎　　亮　・坂居　　聡

・永岡　卓也　・大家　弘聡

【募集要項】

平成 12 年に犀川大橋・浅野川大橋が登録有形文化財に認定された。金沢には社寺など建築物の文化財は多いが、土木系の橋等（坂や石垣）の構築物は少ない。この研究では市内に点在する構築物を丹念に調査するフィールドワークからはじめたい。

歴代研究員寄稿

金沢の土木遺産へ向けて
室　穣（１Ａ）

土木構造物とは、人の生命や財産を守り、地域経済を支える使命を持つものである。時代と共に物の見方、考え方、とらえ方も変わり、価値観も変化してきている故。老朽化、機能低下等により、即取り壊される宿命にある物も多いが、物によっては半永久構造物として大切に保存する必要のある物も少なくない。

この様な背景の中、近代土木構造物の保存と活用を目指し、平成１１年、浅野川大橋と犀川大橋を国の登録有形文化財（平成８年制定）として指定を受けるべく、周辺住民の皆様と共に「文化財登録を提案する有志のつどい」を結成し、指定申請に向けた運動を展開した。両橋の歴史的経緯、構造特性、景観、市民の愛着等から考慮した時、近代土木遺産として登録文化財に相応していると言う、故「小堀為雄」先生からの所見を頂き、文化財登録がなされた。

時期を同じくして、「金沢まちづくり市民研究機構」の創設により、市民にたいして政策研究への呼びかけがあり、「文化財としての橋等の調査研究」分野に参加した。その中で、市民生活の中に守り引き継がれている歴史的土木構造物に着目した。１）文化財制度、２）金沢の橋、３）金沢の用水、坂みち、石垣、石積を３本の柱として、小堀先生を始めグループ研究員８名でスタート。湯涌創造の森で合宿、尾山神社のアーチ型石橋（図月橋）をはじめ他諸々調査から築造については勿論、往時の人々の生活にまで話題が弾み、思い出の多い研究会になった。まとめられた報告書が今後の土木遺産に向けての一助となれば幸いである。

第１期Ｂグループ

まちなか再生のためのまちづくり

ディレクター：川上　光彦

研究員

・神谷　浩夫　・所村　敬治　・本多　義忠
・浅田　三郎　・能登　平則　・植竹　俊光
・米田　裕吉　・大竹　　滋　・埒　　正浩
・増田　達男　・久田　吉一　・水野　雅男

【募集要項】

金沢の魅力と特徴は、歴史的に継承されてきた「まちなか」にある。それを構成する住まい、建築、街並みなどについて、市民や行政が協働しながら、安全・安心して住みよいものにしていくための諸方策について研究する。

歴代研究員寄稿

市民研究活動を振り返って
水野　雅男（１Ｂ、２Ｂ、３Ｂ、４Ｂ）

市民研究機構では、金沢が直面している課題、とりわけ市民が生活の中で感じている課題をテーマとして取り上げ、調査研究しているのが評価できる。私自身も４年間研究員として在籍し活動に加わったが、大学生から専門職、一般市民まで幅広いメンバーがテーブルを囲んで議論できるスタイルが素晴らしかった。しかも、研究した結果を政策（施策）提言し、具体的なプロジェクトへ昇華している事例も見られることは、市民が主体のまちづくりを大きく推進するといえる。

提案が具現化したプロジェクトの一つに NPO 法人金沢アートグミがある。市民研究機構のアート系グループでは、金沢 21 世紀美術館のオープンに触発されて、街なかのアートセンターを市民レベルでマネジメントするアート NPO の重要性に言及した。その活動拠点を確保することが必要ということで、近江町の再開発にあわせて空間利用を再考していた北國銀行武蔵が辻支店の上階を見事に確保した。北國銀行から受託してギャラリースペースの運営と自主企画展を行っている。その管理業務を受けるにあたり、NPO 法人が設立され、私も役員の一人として名を連ねることになった。その後も、文化庁などから活動助成を受けながら、アーティストのアトリエやギャラリーを連携する金沢クリエイティブツーリズムの社会実験に取り組むなど、着実な活動を積み重ねている。市民研究機構での検討が、金沢のアートシーンをリードするまでになっていることは大きな成果と言えるだろう。

第１期Ｃグループ

アートからのまちづくり

ディレクター：水野　一郎

研究員

・長谷川直哉　・吉脇　正勝　・越野外至雄

・中野　圭輔　・藤井　将史　・中村　幸介

【募集要項】

パリもベニスもバルセロナも美術館や劇場の中だけではなく、まちにアートがあふれている。21 世紀美術館の開館を控える金沢で、まちや市民とアートの新しい関係を考え、アートシーンあふれる世界都市を構想してみよう。

第１期Ｄグループ

金沢型創造産業を考える

ディレクター：佐々木雅幸

研究員

・中村　俊介　・田中　康司　・織部　秀一

・中村　弘志　・三田　康博　・北村　光雄

【募集要項】

21 世紀美術館のオープンを間近に控え、文化都市金沢に相応しい、デザイン・映像・音楽・マルチメディアコンテンツなど新しい都市型産業として注目される創造産業をどのように作り出すか、その政策スキームを考えてみたい。

第１期Ｅグループ

情報化社会を実感できるまちづくり

ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・阿濱　茂樹　・末栄　康則　・飛山　涼子

・濱　　博一　・髙本　芳昭　・古市　善丈

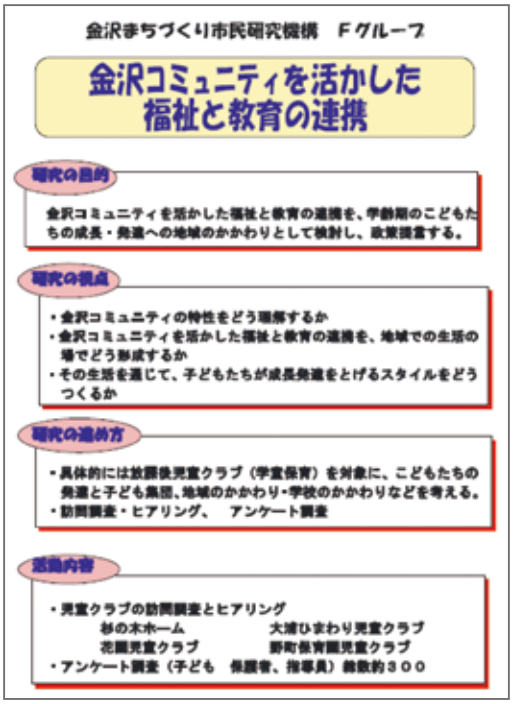
・宮地　順子　・中川　伸久

【募集要項】

総務省の情報流通センサス、経済産業省の特定サービス産業調査などの統計資料では、金沢はＩＴ先進地域になっているが、我々にその実感はない。そこで、情報化社会を実感できる街づくりや産業の育成についての政策を考えていこう。

第１期Ｆグループ

金沢コミュニティを活かした福祉と教育の連携



ディレクター：横山　壽一

研究員

・国光　哲夫　・榊　　国雄　・張江　和子

・田井志保里　・岡本　　一

【募集要項】

福祉と教育の間には、本来深いつながりがある。金沢のコミュニティが備える地域共同の力を、このつながりを取り戻し発展させるためにどのように活かすことができるか、教育プラザ富樫の活用方法も含めて検討します。

第１期Ｇグループ

金沢箔をまちづくりに活かすためのデザイン研究

ディレクター：黒川　威人

研究員

・松村　謙一　・今井　康弘　・木下　正樹

・藤野　英明　・黒氏　宇吉　・寺本　健一

・小笠原晶子　・恩地　章弘

【募集要項】

金沢箔は全国生産の 99% を占めるとされ、国の伝統的工芸品産業の中でも特異な存在です。従来の仏壇をはじめとする室内工芸品だけでなく、これからは世界都市金沢の個性となるよう屋外でのデザイン展開を計りたい。

第１期Ｈグループ

健康増進のための環境づくり

ディレクター：中川　秀昭

研究員

・植田　洋子　・田中　健一　・戸出　大輔

・徳山　一也　・櫻井　庸子

【募集要項】

生活習慣は、がん・循環器疾患などと深く関連しているため、病気を予防し、更に一層健康増進を図るためには生活習慣の是正が大事です。生活習慣を変えることは本人の努力がなくてはならないことだが、周囲の環境整備も大切です。（例えば、禁煙を支援するための無煙環境づくり）金沢らしい健康増進のための環境づくりについて考えてみたい。

第１期Ｉグループ

金沢「環境都市」構想

ディレクター：三国　千秋

研究員

・吉田　　洋　・前田輝代治　・見瀬　弘美
・谷内　昭慶　・永井　俊宏　・坂井　修二
・鵜　　謙一　・堀場喜一郎　・館農　勝彦
・新村　光秀　・堀田伊希子　・永原　忠和

【募集要項】

ここで「環境都市」ということで考えられているのは、例えば、ドイツの地方都市（人口 20 ～ 40 万）です。ゴミの減量化や生ゴミのリサイクル、自動車中心の交通から自転車や公共交通への転換はいかにして可能だろうか。きれいな空気と騒音のない中心市街地を取り戻し、歩けるような街にするにはどうするかなどについて研究してみたい。

第１期活動風景

倉敷市において、大原美術館の館長や学芸員、商工会議所の方々とのヒアリング（Ｃグループ）

第２期Ａグループ

世界都市としての 金沢らしさの創出

ディレクター：小堀　為雄

研究員

・村中　泰雄　・西尾　欣一　・長島　健治
・北川　文男　・東原　洋輔　・田丸　文崇
・宮岸　好一　・長谷川直哉　・山田　尚史
・越野外至雄

【募集要項】

金沢は国際的文化産業都市を目指して、世界の多くの都市と連携をとりながらその中でピカーと輝く都市、すなわち「オンリーワン都市」を模索している。本研究では「金沢らしさ」をキーワードとして、ハード・ソフト両面から捉えることによって問題を整理し提言することを試みる。すなわち、生活文化としてのソフト、用水、神社仏閣、武家屋敷などのハード。ひいては大学・市民・行政との共同参画都市づくり政策を考えたい。

第２期活動風景

安全･安心な農産物の提供を目指した活動を行っているＪＡ福光の見学（Ｅグループ）

第２期Ｂグループ

まちなか再生のためのまちづくり（その２）～まちなか定住促進～

ディレクター：川上　光彦

研究員

・神谷　浩夫　・所村　敬治　・本多　義忠
・若生　幸也　・増田　達男　・大竹　　滋
・埒　　正浩　・永山　敬三　・植竹　俊光
・外山　恒夫　・米田　裕吉　・水野　雅男

【募集要項】

金沢のまちなかには、歴史的資産としての建築、まちなみ及び多様な人々による暮らしがある。昨年度の研究成果を踏まえ、それらを生かしながら、誰もが安心して暮らせる住まいや住環境のあり方について研究する。

歴代研究員寄稿

協働のまちづくりが進展することを期待して

埒　正浩（１Ｂ、２Ｂ、３Ｂ、４Ｂ）

市私が研究員として参加したのは、第１期（平成 15 年）から第４期（平成 18 年）までの４年間です。ディレクターの川上光彦金沢大学教授をはじめ、金沢市役所の担当課の皆さんには、大変お世話になり、ありがとうございました。

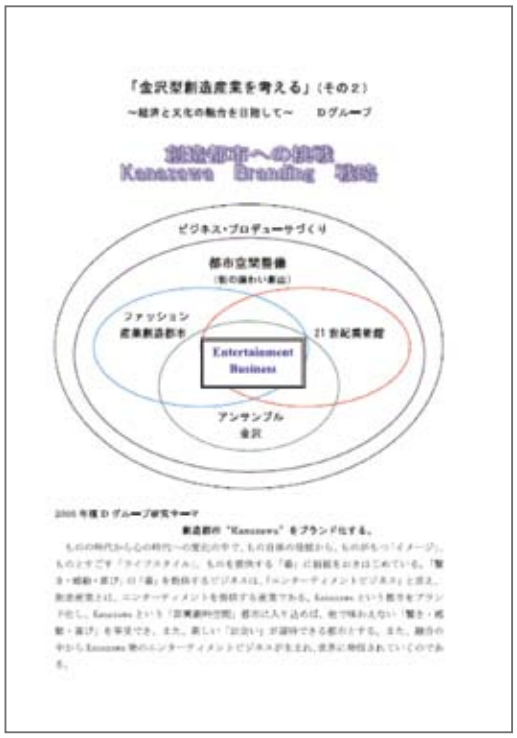
私達のＢグループは、第１期・第２期では「まちなか再生」や「まちなか定住」をテーマに、（仮称）金沢まちづくりセンターや町家の保存活用等を提案し、第３期・第４期では「市民・住民の参加・主体によるまちづくり」をテーマに、市民活動団体の活動の場、支援制度、情報発信等を提案しました。メンバーは、大学教授や会社員、公務員、学生などさまざまでした。活動は、研究会を２週間に１回程度開催し、研究の進め方などについて議論しました。

研究会では初めて出会った方が多く、お互い主張が異なるため、時には意見が衝突し、まとめるのに苦労しました。楽しかったことは、国内外の先進地調査を行なったことです。そうした活動を通してメンバーが打ち解け、研究の方向性を共有したりしました。現在も親しくさせていただいている方もいます。

金沢では、町内会などコミュニティ主体の住民活動は盛んですが、同じ志を持つ者同士による市民活動は少ないと思います。今後は、自主自律した市民活動がますます盛んになり、住民活動と市民活動が縦糸と横糸となって紡ぎあうような、協働のまちづくりが進展することを期待したいと思います。

第２期Dグループ

金沢型創造産業を考える（その２）～経済と文化の融合を目指して～



ディレクター：佐々木雅幸

研究員

・能登　平則　・畠　　聡一　・中村　俊介
・田中　康司　・小西　和文　・中村　弘志
・織部　秀一　・三田　康博

【募集要項】

今秋オープンする 21 世紀美術館を単に新しい芸術文化の殿堂とするだけなく、美術館がデザイン・映像・音楽・マルチメディアコンテンツ・ファッションなど新しい都市型産業のインキュベータとしての機能をも果たせるような政策提案を具体化したい。

第２期Ｅグループ

情報化社会を実感できるまちづくり（その２）～誰もが住みやすいバリアレス・ストレスフリーな金沢をめざして～

ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・末栄　康則　・松井　賢和　・木村　秋斗
・木村　啓治　・阿濱　茂樹　・流　　明
・宮地　順子　・髙本　芳昭　・杉原美佐子
・飛山　涼子　・古市　善丈　・中川　伸久

【募集要項】

金沢は、世界が憧れる都市をめざして世界都市構想を展開中であり、日本海側の中心都市となり、大学や高等研究機関も集中し、人的交流や国際化も進んできている。一方、そうした繁栄が、モラル低下や治安悪化を起こしたり、支店経済化や高齢化社会などの問題も起こしている。しかし、ＩＴを使ったユビキタス技術によって、問題解決し、子供から高齢者、障害者、外国人などどんな人でも、スマートに生活できる社会を構築できる可能性がある。これを、市民生活者の立場とＩＴ専門家の立場から知恵を出し合い、場合によっては簡単な社会実験をすることで、良い施策を模索する。

第２期Ｆグループ

金沢コミュニティを活かした福祉と教育の連携（その2）～福祉・教育と人づくり～

ディレクター：横山　壽一

研究員

・三井美千子　・榊　　国雄　・張江　和子

・国光　哲夫　・田井志保里

【募集要項】

金沢コミュニティが備える地域共同の力を福祉・教育に活かしていくためには、その力を地域で担う人材を継続的に育成していくことが不可欠である。どのような資質を備えた人材を、どのような場で、いかなる仕組みによって育成していくかを、金沢コミュニティの再生戦略の検討とあわせて、総合的に考えてみたい。

第２期Ｇグループ

金沢箔をまちづくりに活かすためのデザイン研究（その２）～まちなかの賑わいづくり～

ディレクター：黒川　威人

研究員

・武野　一雄　・黒川　鈴代　・松村　謙一

・石黒　雅文　・黒氏　宇吉　・島田　洋子

・中原多嘉朗　・小笠原晶子　・今井　康弘

【募集要項】

第１期では金箔が似合う空間をサーヴェイした結果、卯辰山麓寺院群をめぐる心の道のサイン計画を行い、一定の成果を得た。第２期ではまちなかを対象に、そのにぎわいづくりと町の風格アップに役立つデザインを研究する。

第２期Ｈグループ

金沢「無煙環境作り」

ディレクター：中川　秀昭

研究員

・北山　新一　・宮川　　剛　・小坂　孝志

・多賀　正紀　・橋本　哲史　・中佐　寛喜

【募集要項】

タバコは多くの病気の危険因子ですが嗜好の問題と片づけられています。しかし、受動喫煙の害や未成年の喫煙は大きな問題であり、一部学校や病院での敷地内禁煙が見られますが、公共の場所での無煙環境作りは十分といえません。どのようにしたらよいかを考えてみましょう。

歴代研究員寄稿

「金沢まちづくり市民研究機構」に参加して

北山　新一（２Ｈ、３Ｈ）

私が「金沢まちづくり市民研究機構」に参加したのは、市の関係者の方からこういう研究テーマがあるので、喫煙している私にやってみないかと誘われたのが理由でした。

研究目的は「喫煙者と非喫煙者がどうすれば共に快適な環境を作り出すことができるのか」で進めていきました。私は喫煙者でありましたが、研究後は喫煙する意識に変化が生じ、また、研究員の１人はこれを契機に禁煙いたしました。

このグループでは、６人の研究員のうち私を含めた５人が同じ職場でしたが、異業種の方と協同の研究を進める形は以後の人生経験のなかでも有意義なものであったと思います。

医学環境専門の金沢医科大学教授中川ディレクターの適切なアドバイスのおかげで無事２年間の研究を終えることができました。

この研究の意義は、一般市民が行政に対し施策の提言ができる全国でも少ないユニークで有意義な取り組みにあると思います。提言にはもちろんすぐに取り上げにくいものもあるかと思いますが、各研究グループはいつか研究成果が市民の目線で金沢市の施策として生きて、全国で誇れる金沢市になることを夢に見て真剣に取り組んでおります。

今後は、現構成に加え、子供（小中高生）参加の研究もあったら面白いと思います。既成事実にとらわれない柔軟な発想も参考になるのではないでしょうか。子供も市民の一員であります。

第２期Ｉグループ

金沢「環境都市」構想（その２）～交通と省エネの研究～

ディレクター：三国　千秋

研究員

・中西　健一　・吉田　　洋　・宮崎　耕輔
・八田　博志　・谷内　昭慶　・雄谷　健一
・永原　忠和　・高松　英輝　・前田輝代治
・畠山　　毅　・館農　勝彦　・鵜　　謙一
・荒井　一郎

【募集要項】

第１期は「交通と環境」の観点から、①公共交通のあり方、②LRT 導入の可能性と財源の確保、③住民合意を中心に研究しました。その関連でアメリカ、ポートランド市を視察しました。第２期は交通の研究を継続すると共に、市民と行政にとって可能な「省エネ」のシステムを探ります。

歴代研究員寄稿

『まちづくり，それは人のつながり』

中西　健一（２Ｉ、３Ｉ、４Ｉ）

私は２～４期の３年間，市民研究機構に在籍させていただきましたが，この間様々な取り組みと貴重な体験をすることが出来ました。

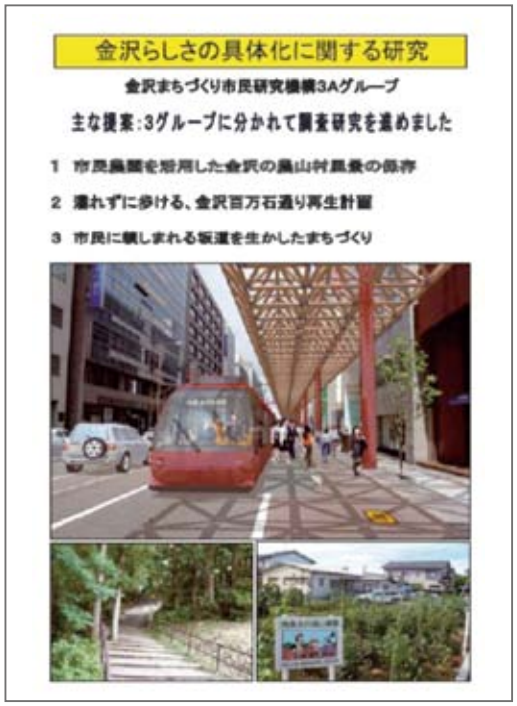
私が所属したグループでは，主に自転車を活用した人とまちにやさしい交通の在り方と，風力や小水力を取り入れた持続可能なエネルギーの導入について研究を行いました。中でも，その当時から先駆的な取り組みがなされていたデンマークへの海外視察は，私にとっては最も刺激的で，その後の活動を裏付ける貴重なものとなりました。とくに視察の中で教わった「To job by Bike」の取り組みは，自転車通勤者を向上させるまさに画期的なもので，この実効性と楽天性を兼ね備えたプロジェクトにならい，私たちのグループを中心にその後 2006～2011 の６年間『ECO サイクルプロジェクト』を継続して開催することになります。私にとって研究機構は，これらの活動を中心に自身を大きく成長させる舞台となりました。

しかしながら，私が研究機構で得た何事にも代え難いものは，ジャンルを超えた多くの方との出会いと人のつながりです。今ではこの人のつながりが礎となり，研究機構を終えた今も NPO の活動に発展して活動は続いています。これは本当の意味で研究機構が生んだまちづくりの原型といえるのではないでしょうか。

今回諸般の事情から研究機構もとうとう幕締めとなりますが，10 年間で培ったこのような金沢版コミュニティの形成は，今後も脈々と生き続けるものと私は確信しています。

第３期Ａグループ

金沢らしさの具体化に関する研究



ディレクター：小堀　為雄

研究員

・村中　泰雄　・北川　文男　・越野外至雄

・西尾　欣一　・長谷川直哉　・宮岸　好一

・加藤真理子　・流　　明

【募集要項】

金沢らしさの具体化をテーマに次の事項について調査研究を行います。

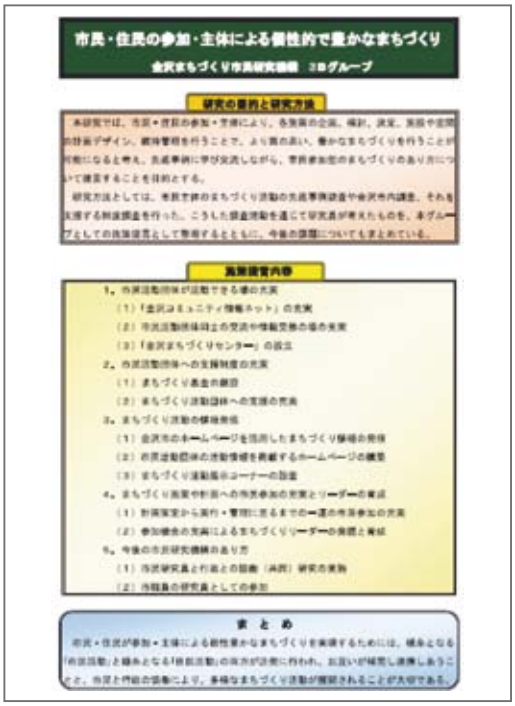
1. 金沢型農業施策として、農山村振興、その風景の保全と啓発について
2. 団塊の世代の人を対象にしたボランティア活動のための、農業技能士 (仮称)、文化資料整理士 (仮称) などの養成研修所の設立について
3. 石川県、金沢市や民間の文化施設の相互運営政策について
4. 金沢型自主防災組織の啓発と発展的政策について

第３期活動風景

自転車移動の可能性を探る「チャリ de アート」プロジェクトの研究（Ｂグループ）

第３期Ｂグループ

市民・住民の参加・主体による個性的で豊かなまちづくり



ディレクター：川上　光彦

研究員

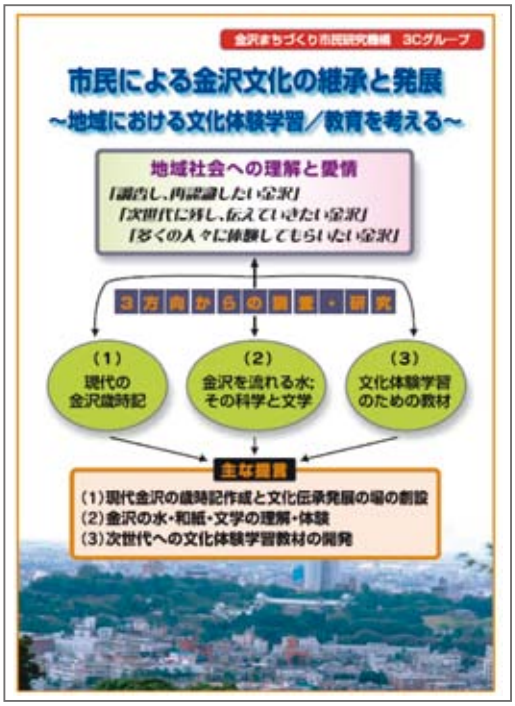
・水野　雅男　・春原　良行　・前川　繁代
・生駒　奉文　・入口　　翔　・吉田　正俊
・本多　義忠　・若松　康之　・林　　正美
・永山　敬三　・本村　聡美　・埒　　正浩
・中村　健哉　・大畑　清隆

【募集要項】

市民・住民の参加・主体により、各施策の企画、検討、決定、施設や空間の計画デザイン、維持管理を行うことで、より質の高い、豊かなまちづくりを行うことができる。先進事例に学び交流しながら、市民参加型のまちづくりのあり方について提言する。

第３期Ｃグループ

市民による金沢文化の継承と発展～地域における文化体験学習／教育を考える～



ディレクター：八重澤美知子

研究員

・堀江　常稔　・安井　史郎　・小関　仁志
・山本　幸恵　・中川　武夫　・毛利　泰江
・森　　啓子　・苗田　敏美　・田丸　文崇
・菅村美知子

【募集要項】

地域に点在する多様な文化資源の発見やその価値の再評価、またそれらを用いた体験学習／教育を通じ、文化の継承と今後の発展について、広くまちづくりの視点から検討する。

第３期Ｄグループ

金沢型創造産業による都市再生～新幹線開業をみすえたまちづくり～

金沢型創造産業による都市再生

～ 新幹線開業をみすえたまちづくり ～　第３期 ３Ｄグループ

第１章「やさしさと夢あふれる町・金沢を目指す」

日本人の美学とは「心の美学」と「型の美学」を重んじてきた。金沢が日本の心を取り戻す「心の場」として、伝統の息づく「型の場」として、金沢を訪れる人々のみならず金沢市民自らが、日本の「美意識」を取り戻す「場」、「健康で過ごされる場」にすることで、大勢の人たちに支持される町になれるはずです。これらを実行する手段として次の企画を提案する。

●日本の伝統美を味わう「四季遊歩」：これは、加賀友禅を着て、加賀蒔絵でしつらえた茶事庭の茶会で四季の自然と味を楽しんでもらえる。

●ルールと健康を身につける企画で、金沢競馬場周辺を広大な「馬事公苑」にして市民・学生・遠出で乗馬を楽しむ観光客が憩える「場」とする。

第２章「職人と都市再生」～職人が活かされるまちづくり～

金沢の特色は伝統工芸の多い町です。西南部伝統的工芸品でも現様の大きいもの小さなもの、他に軽少工芸を含めて３６種があります。

それぞれの業種で今も職人が心を込めて仕事をしています。市民アンケート調査でも伝統工芸、伝統文化に高い愛着度が示されています。

第３章　住民組織とくらしの再評価　～ 金沢・香林坊の活動を通じて ～

市と民生委員と地域住民の共同研究による「地域ディサービス」が開始され、老人や障害者が介護を必要になっても住み慣れた地域で住み続けることができるようにする地域福祉として注目されている。

地域住民のくらし、特に高齢者・障害者の家族に対しての支援拠点として香林坊は格好の施設といえる。ただし、財政の問題、公民館等の公的施設との役割分担の問題、運営ボランティアにどこまで頼れるか等の課題が目白押しとなっている。

第４章　金沢における「創造的コミュニケーションの場」づくり

新幹線開業期に向け、金沢都市圏での「創造的コミュニケーションの場」の創出をいかに図るかですが、欠くことのできない要素要素は『市民力の増域・向上』となろう。

①『市民力』成熟都市や創造都市実現の上で、市民の力の総力が協働できる源泉。

②『参加と協働、実践力』市民力の連携・協働・共有と柔軟かつ実践的な『実践力』。

③『コンパクトシティ』公共交通優先や高密度な市街地形成で、対話機会が増大。

④『歩行者主体の中心市街地』回遊に富む街並みと豊かなコミュニケーション環境。

⑤『交流と感動』豊かなコミュニケーション環境創出で交流と感動に益を合え、更なる対話（議論）機会が育まれて、市民力を減とより成熟した都市環境とを構築。

第５章「金沢・観光文化情報システム」の構築試案

近年の旅行者の動向はその動機、形態に大きな変化を示しており、従来型の旅行内容では満足せず、自分参加型の主体性のある旅を求めている。

多様な要望にこたえていく必要性、需要喚起のために、今まで経験したことのない新しい要素をより早く、的確に伝える必要性がここにきているとおり、このための情報提供システムを立ち上げることが急務であると考える。

ディレクター：佐々木雅幸

研究員

・石田　憲二　・能登　平則　・北澤　寛司

・吉田　　洋　・織部　秀一

【募集要項】

新幹線開業を間近に控え、質の高いまちづくりが求められている。金沢の伝統文化と先端芸術を融合して、創造的な産業を創造し、同時に既存産業の革新と再創造をはかりつつ、生活の質を向上させる政策を検討する。

歴代研究員寄稿

「市民研究機構」の建物は、かつて「北陸学院中等部」だった

吉田　洋（１Ｉ、２Ｉ、３Ｄ、４Ｄ、７Ｄ、８Ｄ、９Ｆ）

全９期のうち、７期を「市民研究機構」でお世話になり、更に３期で「グループ代表」を務めさせていただきました。前の山出保市長の言を借りれば、典型的な「こんじょっし（根性好し、根性善し）」ということになりましょうか。!?

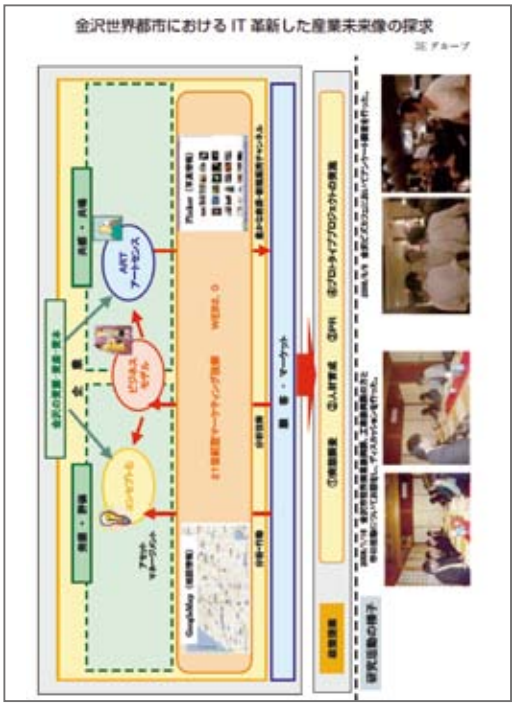
さて、吉田が所属した研究チームは、１～２期が「環境都市（三国千秋Ｄ）チーム」、３～４期は「創造都市（佐々木雅幸Ｄ）チーム」、７～８期は「観光都市（井上克洋Ｄ）チーム」、そして第９期が「アートデザイン都市（坂本英之Ｄ）チーム」でした。およそ２期毎に同じディレクターでのチームに所属したのは、『学ぶ』という立場からは、理想的な配分だったように感じています。

ところで、私（吉田）は、「市民研究機構」が開設されていた『金沢市役所南分室』にも大いなる愛着を抱いた者の一人でした。特に後半の４～５年間は、この建物にあたかも「母の懐に抱かれる」ような温かみを感じておりました。何でもこの建物の前身は、とても歴史ある教育機関『北陸学院』の中等部の学び舎だったようです。そのあかしは、正面入り口上部の三つの紋章でしょう。その真ん中の紋章には、はっきり『Ｈ』の文字が浮き彫りになっています。

トイレに往く廊下を歩けば、頭上に設備用配管が露わになっておりましたし、我々の研究室の天井を仰いでみても、蛍光灯照明などへの配管がうねうねと張り巡らされておりました。とある暑い夏の日でしたでしょうか、３階はどうなっているんだろうかと、ふと想って階段を昇ってみたら、大きな教室を予感させるスペースがひっそりと待ち受けていました。多分この中には、100 人位が入れる階段状のとてもおしゃれでメモリアルな議会棟のような講堂が収まっていて、北陸学院中等部時代には、若葉の如き可憐な女生徒等が悲喜こもごもに、入学式や卒業式などの節目の式典に参列していたに違いないなぁ、と 40 ～ 50 年前頃の室内の風景をしばし慮（おもんばか）っておりました。

第３期Ｅグループ

金沢世界都市におけるＩＴ革新した産業未来像の探求



ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・鏑木　基由　・亀田　修二　・岡谷　泰三

・濱　　博一　・阿濱　茂樹　・野﨑えりか

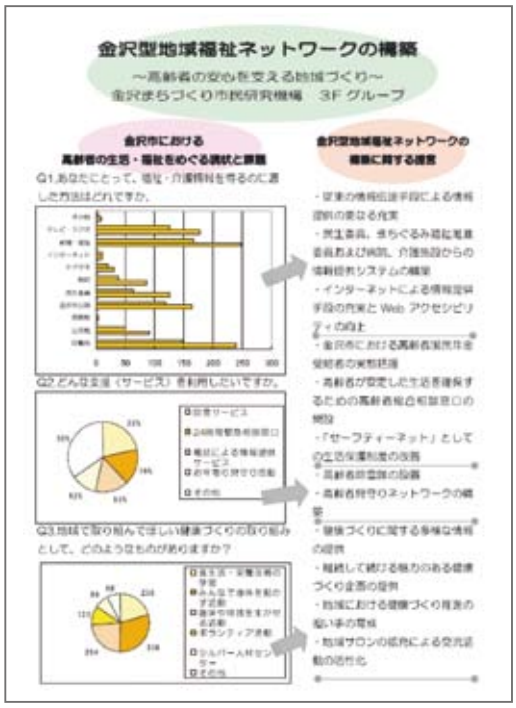
・中村　友紀　・杉原美佐子　・宮地　順子

【募集要項】

インターネット、携帯電話などのＩＴの普及によって、様々な産業のビジネスシステムが大きく変化してきた。2006年7月には地上デジタル放送も開始され、さらに変化する兆しがある。一方で、金沢市はファッション産業都市宣言を行い、文化芸術を基礎にした産業集積をはかり、世界に通用するビジネスを応援していく。ＩＴは様々なビジネスの採算性やサービスを向上させ、世界に通用するビジネスに作り変える力を持っている。そうした事例を研究すると同時に、金沢世界都市に相応しいビジネスに革新する方策を具体的に案出したい。また、それを支援する行政政策についても、就業形態や21世紀型ライフスタイルを含め検討する。

第３期Ｆグループ

金沢型地域福祉ネットワークの構築～高齢期の安心を支える地域づくり～



ディレクター：横山　壽一

研究員

・吉田　由美　・田井むつ子　・木村　啓治

・下崎　義宏　・榊　　国雄　・三井美千子

・江見千恵子　・山中　慎介　・佐々木達人

・土屋瑠見子　・木村　孔明　・林　　正人

・安嶋　是晴　・西　　崇広　・田井志保里

・正田　和行

【募集要項】

老いても安心して住み続けることができるための地域づくりについて考えます。地域で活動する人と組織がどのようにつながり、いかなる役割を果たす必要があるかを検討し、金沢らしい地域福祉ネットワークの構築へむけた提言をまとめます。

第３期Ｇグループ

金沢アート創造計画　～金沢からユニークなアートを提案する～

ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・武野　一雄　・島田　洋子　・高橋　治希

・川村　元紀　・宇井亜津佐　・松村　謙一

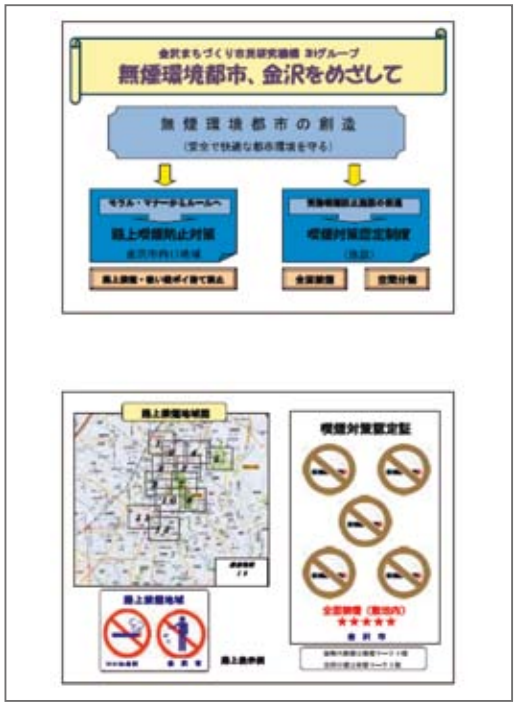
・中森あかね　・矩　　一浩

【募集要項】

現代社会におけるアート機能の可能性を探り、アートの立場から産学行民の連携や知的財産の新たな活用を計画します。ローカルな場からグローバルな創造的関係を発信し、金沢スタイルと呼べる挑戦的で実験的なアートプロジェクトを提案します。

第３期Ｈグループ

無煙環境都市、金沢をめざして



ディレクター：中川　秀昭

研究員

・中佐　寛喜　・長谷川政人　・北山　新一

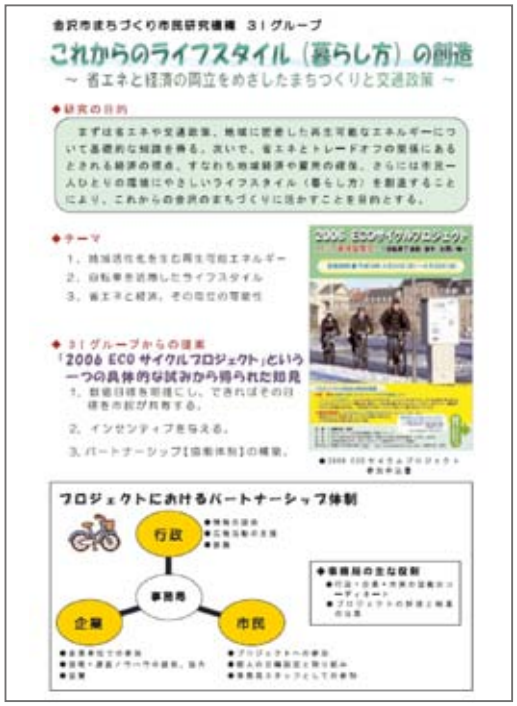
・小坂　孝志　・多賀　正紀　・宮川　　剛

【募集要項】

現在たばこの有害性が広く認識されるようになり、多くの人が集まる場所や職場での喫煙対策が進められ、商店街や学校、病院等の諸施設での敷地内禁煙などが各地で実施されていますが、観光都市金沢にあってはまだ遅れが目立っています。平成 16 年より本テーマに取り組んでおり、各企業や自治体などの取組の現況調査を基に、当面の施策として何が必要かを絞り込んでいます。平成 17 年はこれを一層発展させて、無煙環境都市、金沢の形成にどのようにしていくべきかの方策を探りたいと考えています。

第３期Ｉグループ

これからのライフスタイル（暮らし方）の創造
～省エネと経済の両立をめざした〈まちづくり〉と交通政策～



ディレクター：三国　千秋

研究員

・中西　健一　・宮崎　耕輔　・前田輝代治
・雄谷　健一　・荒井　一郎　・永原　忠和
・館農　勝彦　・鵜　　謙一　・村尾　彰拓
・南　　裕基　・室井　定志

【募集要項】

本研究グループでは、これまで省エネと交通政策の研究を進めてきました。

今年度は、これらを経済という観点から研究します。地域経済、雇用の確保、新しい雇用の創出が課題です。

歴代研究員寄稿

市民研究機構を想う
永原　忠和（１I、２I、３I、７F、８F）

市民研究機構が今年で幕を閉じてしまった。まことに残念で惜しいと感じている。私は１期から３期、そして７期と８期とお世話になった。今でも、旧生涯学習センターで募集要項を見たときの感激は覚えている。ちょうど独立して、時間的にも余裕ができ何か地域に貢献できることはないかと思いめぐらしていた時だった。これは面白いことが出来そうだ!と即座に応募を決意。締切を見ると２日前。これはヤバイと思い、ものの 20 分ほどで応募動機と申込書を書いて、市役所に直接持っていったのである。

最初の３年間は環境グループ、その後はアートグループに所属した。幸運だったのは、その両方でＮＰＯの設立に携わることが出来たことである。２期の環境グループのメンバーを主体に設立した NPO 法人市民環境プロジェクトでは、2010 年に市民風車を建設するなど自然エネルギーを推進している。またアートグループでは、2009 年に NPO 法人金沢アートグミを設立し、アートと地域や市民をつなぐ活動を実現している。このように政策提言だけではなく実際に具現化できたことは、非常に有意義であり、市民研究機構の大きな成果と感じている。

また市民研究機構の活動を通じて、私も含めメンバーが様々なネットワークを築き、その輪が広がっていったと実感している。これも、研究機構の貴重な所産であろう。それよりも金沢にこのような集団があったことをとても誇りに思っている。他のまちでは、実現は難しいだろう。これは、金沢が学都であり有為な人材が豊富だったことと市民が金沢を愛しているからこそ可能だったと確信している。そういった人たちと時間を共有できたことは、貴重な経験であった。この９年間の事績が金沢のこれからの発展に必ずや寄与していくと信じている

第４期Ａグループ

お年寄りから子どもまで市民に幅広く利用される公園の研究

ディレクター：小堀　為雄
　　八重澤美知子

研究員
・菅村美知子　・堀江　常稔
・苗田　敏美　・毛利　泰江

【募集要項】
２１世紀の金沢にふさわしい公園を考え、それを金沢市の公園づくりの具体的施策に反映可能な提案をすることを目標に研究を行う。

歴代研究員寄稿

金沢まちづくり市民研究機構での６期間の研究を振り返って

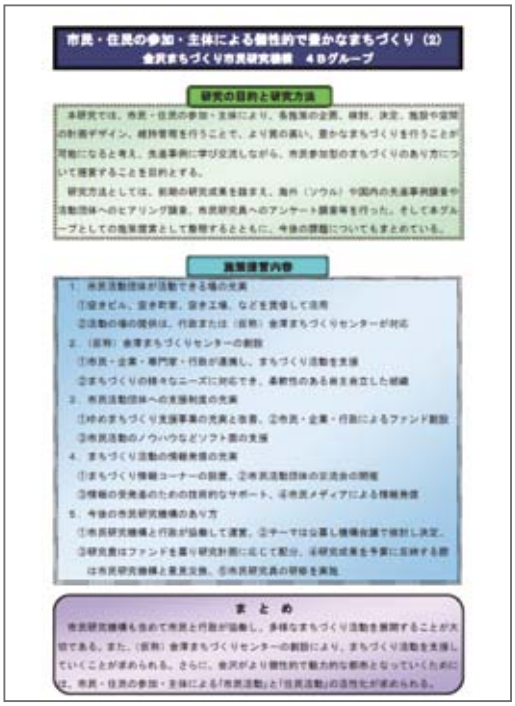
菅村　美知子（３Ｃ、４Ａ、４Ｃ、５Ｂ、６Ｂ、８Ｂ、９Ｂ）

３期のテーマ「市民による金沢文化の継承と発展」に共感し以来６期間、研究員として関わってきました。金沢らしさを培ってきた先人達の有形無形の価値ある金沢の文化と進化する多様なライフスタイルから生まれる斬新な文化との継承と発展は、熟考もせず古い物を簡単に消去する考えに警鐘をならす上でも重要なテーマでした。同時に、国際都市を目指す金沢は年々多くの海外からの人達が行き交う街になり、私たちの隣人としても外国籍市民が共に生活しているなかで、多様な異文化への理解が双方に求められ、身近になった多文化共生社会への対応は近々の問題として様々な研究課題にも取り組んできました。

９期まで一貫して同じグループで研究してきましたが、私のみならず共に研究してきた学生や留学生たち、外国籍の方々や地域の方々、指導して頂いたディレクター、この関わった全員が金沢を想い、愛する心は本当に熱く真剣なものでした。だからこそ多くの提案を出すことが出来たのだと思います。多文化共生を含め文化をキーワードにまちづくりを考える上で、長岡国際交流センターの羽賀氏に出会えたことは私の原点になりました。またリベラルな立場の市民が大学の研究者とチームを組んで研究し提案していくシステムは、市民参加型の新しい市政のスタイルだと思っています。研究成果は短期・長期的に市政に反映する以外に、貴重な原石ともいえるアイデアやヒントの知恵の宝庫でもあり、さらに豊かに膨らませて生かして欲しいと願っています。多くの素晴らしい方と出会い、金沢について討論し研究機構に参画できた経験を誇りに思い、グループを常に優しく全力で対応してくださった素晴らしいディレクターに心から感謝しつつ、金沢がさらに良いまちに継承、発展するために、これからもこの経験を生かし積極的に活動していきたいと思います。

第４期Ｂグループ

市民・住民の参加・主体による個性的で豊かなまちづくり（２）



ディレクター：川上　光彦

研究員

・埒　　正浩　・中村　健哉　・本多　義忠
・開　　國嘉　・北川　文男　・生駒　奉文
・若松　康之　・本舘　孝文　・加藤　　裕
・前川　　大　・田中　　悠　・水野　雅男
・流　　明

【募集要項】

市民･住民が参加･主体により、各施策の企画、検討、決定、施設や空間の計画デザイン、維持管理を行うことで、より質の高い、豊かなまちづくりを行うことができます。先進事例に学び交流しながら、市民参加型のまちづくりのあり方について提言します。

第４期Ｃグループ

市民による金沢文化の継承と発展 II ～地域における文化体験学習／教育を考える～

ディレクター：八重澤美知子

研究員

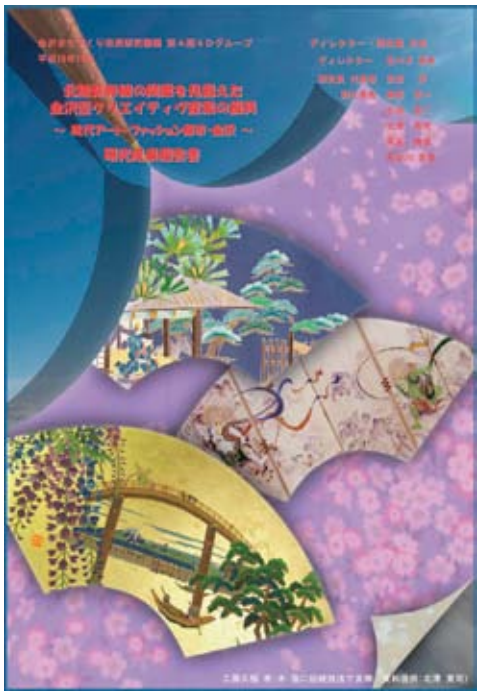
・中川　武夫　・黒瀬　　清　・森　　啓子
・越野外至雄　・菅村美知子　・苗田　敏美
・堀江　常稔　・毛利　泰江　・安井　史郎

【募集要項】

金沢には、美しく豊かな自然と古くからの歴史と伝統に育まれた文化があります。広く地域と地域の文化力に着目し、第３期の成果に基づき、教育を通じて次世代への継承および新たな展開について考えます。

第４期Ｄグループ

北陸新幹線の開業を見据えた金沢型クリエイティヴ産業の振興
～現代アート・ファッション都市・金沢～



ディレクター：佐々木雅幸

研究員

・石田　憲二　・北澤　寛司　・織部　秀一

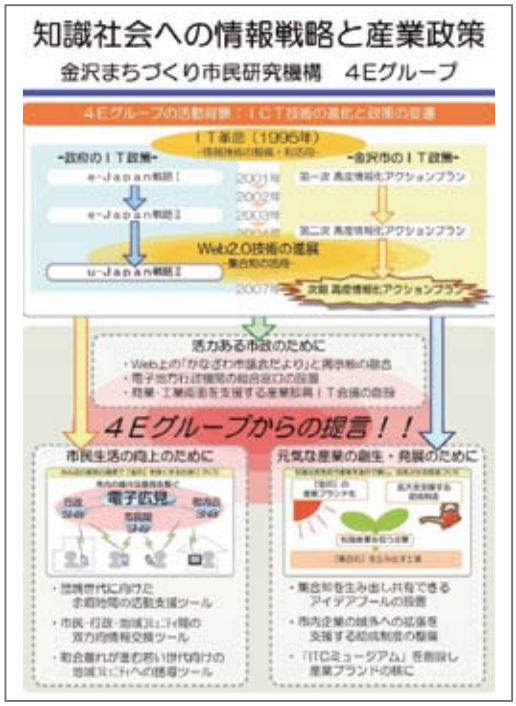
・吉田　　洋　・長谷川直哉　・高畠　勝彦

【募集要項】

北陸新幹線の開業を目前に控え、21 世紀美術館で高まった現代アートへの関心を基盤に、金沢の伝統を踏まえたあらたなるクリエイティブ産業をどのように振興するのか、ファッションウィークの成果を分析しつつ、若手アーティストへの支援策も検討します。

第４期Ｅグループ

知識社会への情報戦略と産業政策



ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・浅田　三郎　・井上　克洋　・岡谷　泰三

・亀田　修二　・杉江　裕子　・高野　　明

・中島　武蔵　・平子　紘平　・毛利　友美

【募集要項】

今、情報化社会から、知識や文化が価値や財を生み出す知識社会へ、変革しつつあります。金沢は、美の街、文化都市であり、IT 産業も活発です。この優位さを生かし、知識社会を支える産業の育成や集積を狙う戦略を探ります。また､知識社会時代に相応しい魅力発信方策も創出します。

第４期Ｆグループ

金沢らしい介護保険と「地域密着型サービス」のあり方を考える

ディレクター：横山　壽一

研究員

・下崎　義宏　・林　　正人　・赤須　治郎

・三井美千子　・榊　　国雄　・安嶋　是晴

・正田　和行

【募集要項】

介護保険法の改正で新たに設けられた「地域密着型サービス」は、地域におけるこれからの介護に大きな影響を及ぼす事業です。そのあり方を中心に、人権と地域コミュニティを尊重した金沢らしい介護保険の取り組みについて考えます。

第４期活動風景

第３善隣館でのデイサービスの調査（Ｆグループ）

第４期Ｇグループ

金沢アートセンター計画

ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・高橋　治希　・松村　謙一　・宇井亜津佐
・矩　　一浩　・川下　隆司　・川村　元紀
・坂本　祥世　・武野　一雄　・竹俣　勇壱
・能登　平則　・林　佳代子　・村中　泰雄

【募集要項】

金沢の都心軸にアートセンターがあれば、現在金沢で行われている多くの展覧会やイベント情報などアートに関る全ての情報を集積して発信できます。アートを中心とした異業種同士をマッチングさせるシステム構築やアートマネージメントのサポートが可能となり、展示スペースやカフェを併設することで若い芸術家や市民に発表の場を提供できます。都心軸の賑わい創出に繋がり、金沢を訪れた観光客に対して情報提供の場ともなります。今期は実際のスペースを想定して、アートセンターの企画や運営方法・組織のあり方についても研究します。

第４期Ｉグループ

人と自然にやさしいまちづくり・「コンパクトシティ」を目指して
～安全で快適な自転車交通と自然エネルギーの研究～

ディレクター：三国　千秋

研究員

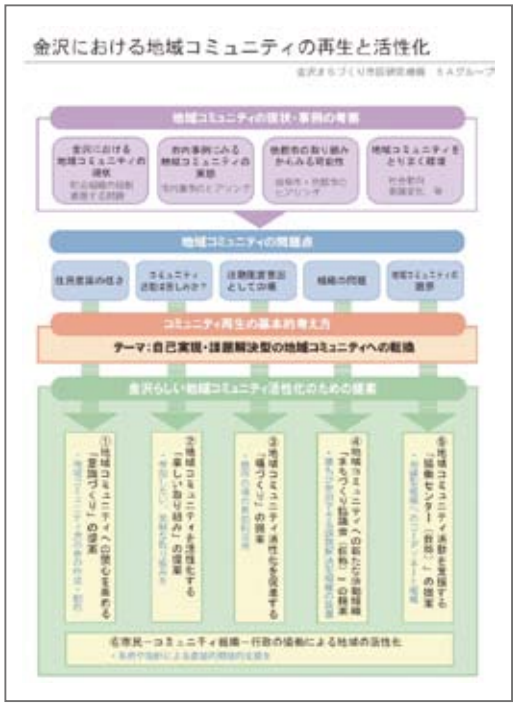
・中西　健一　・村松　　明　・高森　保樹
・前田輝代治　・宮崎　耕輔　・沖　伊知郎
・諸星　　健　・荒井　一郎

【募集要項】

金沢市の将来を踏まえて、持続可能な発展に沿ったまちづくりを行うには　どうしたらよいかを考えます。自転車は健康づくり、町並みの新たな発見、コミュニケーションのツールとして今見直されています。自然エネルギーの研究では、小型水力発電や木質バイオマスの可能性を探ります。

第５期Ａグループ

金沢における地域コミュニティの再生と活性化



ディレクター：川上　光彦

研究員

・安江　雪菜　・廣瀬　康之　・片岸　将広
・桑原　直樹　・講神　雅人　・永山　敬三
・西尾　欣一　・開　　國嘉　・三ツ田佳代
・本舘　孝文

【募集要項】

金沢市は、小学校の区域を単位とした校下というコミュニティの概念があり、これまで、校下を構成する各町会、公民館、子ども会、婦人会や地区社会福祉協議会、消防団等が有機的に連携して、祭礼やスポーツ、その他の地域の行事や各種の福祉活動、消防活動等の多様な展開が行われてきた。近年、中心市街地の空洞化や少子高齢化などによって、コミュニティ活動が崩壊しつつあることから、金沢市の歴史・文化・伝統を受け継ぎ発展させながら、２１世紀にふさわしい市民参加型のまちづくりの一環として、地域住民が一体となってコミュニティの再生を図り、地域を活性化していくための方策（町会活動の活性化など）を検討する。

第５期活動風景

岐阜市における地域に根ざしたまちづくり組織
「加納まちづくり会」の視察（Ａグループ）

第５期Ｂグループ

世界都市金沢の実現に向けた多文化共生の推進

ディレクター：八重澤美知子

研究員

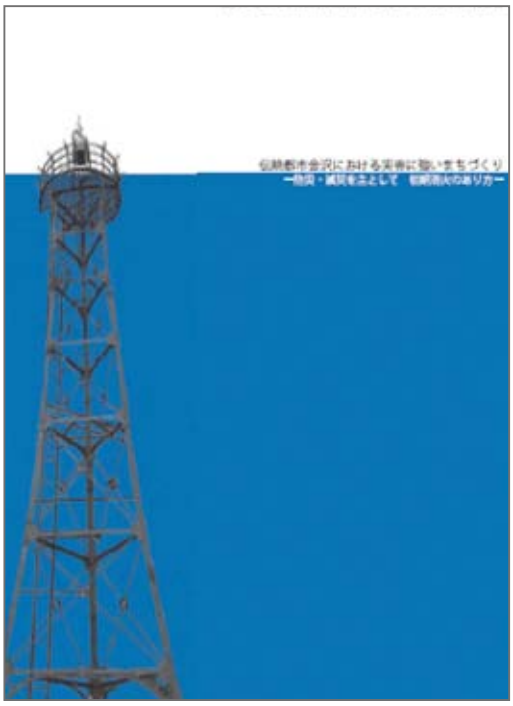
・森　　啓子　・中川　武夫　・太田マルガリータ
・笠間　昭子　・小嶋　久之　・櫻井由紀音
・菅村美知子　・バーサンデーシザー
・三ツ井智子　・西本　大介

【募集要項】

人・モノ・情報が、国を越えて移動するグローバル化の時代にあって、金沢には市民のおよそ１％を占める4,076名の外国籍の人々が暮らしている（2007年４月１日現在）。私たちの地域はこれまでにも、様々な「国際交流」行事を通じて地域の国際化に努めてきた。これを受け継ぐとともに、なお一層の国際化の進展のためには、外国人住民も私たちと共に地域で暮らす仲間であり、金沢市の構成員でもあるという「多文化共生」の視点が必要となる。世界都市金沢の実現に向け、地域における多文化共生に必要な取り組みと課題を検討する。

第５期Ｃグループ

伝統都市金沢における災害に強いまちづくり～防災・減災を主として　初期消火のあり方～



ディレクター：中森　　勉

研究員

・坂本　善昭　・吉島　　衛　・谷重　義行
・土田　　満　・家山　　真　・北川　文男
・米　今日子

【募集要項】

先般の能登半島地震では、伝統構法による家屋の被害は軽微にとどまったと言われている。また、災害復旧に対しては、地域住民と各方面からのボランティアとの協働作業によって素早い復旧が実施された。

こうした能登地域における地震の教訓をハードとソフト両面から詳細に調査・研究を行い、歴史的建築物が数多く現存する金沢の防災対策、安全・安心な「災害に強いまちづくり」に取り組むための方策を検討する。

第５期Ｄグループ

外国人にとっても魅力があり来訪しやすい国際観光都市金沢を考える

ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・井上　克洋　・氏家　寛子　・小倉　淑恵
・神崎　淳子　・小松　　哲　・杉江　裕子
・谷口　和男　・田丸　文崇　・平子　紘平
・若月　博延

【募集要項】

北陸新幹線の開通を数年後に控え、観光都市金沢として、団塊の世代などの県外観光客や、外国人観光客の受入れ態勢の整備が急務と言われる。携帯電話の GPS を活用した案内や、名所旧跡・お店の情報、Web2.0（情報システムの新技術）的なマーケティング、これらの各国語対応など、情報システム技術 (ICT) による整備が考えられる。今後、どのような施策を展開すべきか、ソフト、ハード両面から研究する。

第５期活動風景

新たな体験型観光の主力スポットとなりうる
「金石・大野地区」の調査（Ｄグループ）

第５期Ｅグループ

障害のある人の就労環境整備

ディレクター：横山　壽一

研究員

・赤須　治郎　・大橋　和史　・高野　　広

・戸水小夜子　・林　　正人　・松下　　昇

・安嶋　是晴　・山本　明彦

【募集要項】

障害者自立支援法が施行されたことから、障害のある方の就労を促進することが一層重要な課題となってきた。金沢市では、これまでにも他に先駆けて様々な取り組みが行われてきたが、なお環境整備が十分とはいえない。なかでも、一般企業における受入れ態勢については、なお多くの課題が残されている。この点の改革も含めて、金沢らしい就労環境のあり方とその整備について検討する。

歴代研究員寄稿

市民参画の意味

林　正人（３Ｆ、４Ｆ、５Ｅ、６Ｅ）

機構における主なる目的は、市民が考える市への政策提言であると考えますが、参加した市民研究員においては、様々な事実を知り、学び、社会に対する多くの気付きが与えられたように感じます。研究員個人の成長を促してくれたことを実感している方も少なくないと思うのです。私自身もその一人で、大変感謝しております。このこと自体は市においても考える市民の増加として歓迎されることであると思います。しかしながら、政策提言と現実の行政との溝は深く、提言の多くは不採用か、採用されたとしても少なからずトーンダウンした結果が多かったことと感じていました。提言の的確性が不十分で、私自身を含めた研究員の力不足を反省すべき点もあるかもしれませんが、そもそも提言そのものが目的であり、提言の実現は二の次であったと考えるべきかもしれません。専門性の高い政策提言に叶う組織や人材に依頼すべきところを、市民に広く募ることでリアルな現実の課題を浮き彫りにするという本来の目的が存在したという意味です。市民参加とはこのように効率性を欠くものかもしれませんが、民意を汲み取る手段として、多くの成果が残されたのではないでしょうか。是非、今後も市民の声に耳を傾け続けて頂きたく思います。ご指導頂きました横山壽一先生ほかディレクターの皆様、機会を与えてくださった金沢市、ともに学んだ研究員の皆様にとても感謝しております。

第５期Ｆグループ

金沢の文化を世界に発信するためのネットワークの構築

ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・高橋　治希　・矩　　一浩　・武野　一雄

・中森あかね　・西尾　健二　・村住　知也

【募集要項】

これからの金沢の魅力づくりに欠かすことができない金沢市文化芸術振興プランの具体策として、金沢市内の町内会･商店街の「まちなかパフォーマンス」「空き店舗展覧会」などの市民レベルの文化芸術活動から能などの伝統芸能まで、さらには、県内・全国・海外の現代アートなどから有名美術館所蔵作品まで、新旧の文化芸術情報を集積した上で、新しい金沢の文化を創造し、世界に再発信するためのネットワークの構築について研究をする。

第５期Ｇグループ

脱マイカーのための金沢版ライフスタイルの研究

ディレクター：高山　純一

研究員

・穴口　智也　・大竹　　滋　・小山安侑美

・小滝　省市　・坂井　香織　・高口　敬生

・轟　　直希　・福田　正輝　・村中　泰雄

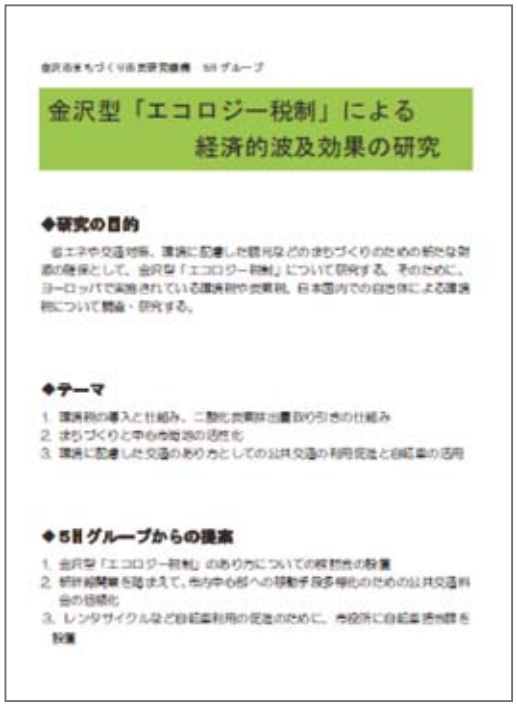
・谷内　昭慶

【募集要項】

歩行者・公共交通優先のまちづくりを進めるには、マイカー抜きでも十分に便利で、快適な生活ができることが必要である。「新金沢交通戦略」では、市域を４つのゾーンに分割し、それぞれのゾーン特性に応じた交通戦略を策定し、これからのまちづくりを展開する予定である。本研究グループでは、金沢市においてマイカー抜きの生活が実際に可能なのかどうか、マイカー抜きの生活をするうえで何が必要なのかなど、その課題を明らかにするとともに、マイカー抜きでのこれからのあるべきライフスタイルを研究する。

第５期Ｈグループ

金沢型「エコロジー税制」による経済的波及効果の研究


金沢型「エコロジー税制」による
経済的波及効果の研究

◆研究の目的

◆テーマ

◆５期グループからの提案

ディレクター：三国　千秋

研究員

・中里　　茂　・永本洋一郎

・宮崎　耕輔　・道下　真也

【募集要項】

エコロジー税制とは、環境に負荷を与える商品、サービス、エネルギーなどに課税するものである。すでにドイツやスイス、デンマークなどでは早くからこのような税制が導入され、一定の成果を生み出しており、日本でも県単位で導入されている「森林税」などはこれにあたる。エコロジー税制による収入は、単に環境保護だけでなく、福祉やまちづくり、雇用創出のために使うこともできる。今日、地方財政の財源が厳しい折、このようなエコロジー税制の導入により、金沢市や石川県での経済的波及効果について研究する。

第５期活動風景

森林環境税の税収使途（県民参加の森作りの推進）の調査（Ｈグループ）

第６期Ａグループ

新幹線時代に向けた金沢型コミュニティ活動の発展と地域の活性化

ディレクター：川上　光彦

研究員

・片岸　将広　・開　　國嘉　・西尾　欣一

・安江　雪菜　・伏見　　新　・桑原　直樹

・松矢裕一郎

【募集要項】

金沢市では、小学校下単位でのコミュニティ組織（町会、公民館、子ども会、婦人会や地区社会福祉協議会、消防団等）が有機的に連携し、地域において様々な活動（祭礼やスポーツ、福祉活動、消防活動等）が展開されてきた。

新幹線時代を迎えるにあたり、この金沢型コミュニティ活動が、真に魅力のあるまちづくりに市民自らが参画する活動として、さらに発展するとともに、その活動を通し、地域を活性化させていくための方策について研究する。

歴代研究員寄稿

金沢型の地域コミュニティ活動研究

安江　雪菜（５Ａ、６Ａ）

もう５年が経ったのかと思うと、ずいぶん昔のことのような、でもつい昨日のことのような不思議な気がします。平成 19 年から 21 年の２年間、5A、6A の研究テーマは、金沢型の地域コミュニティに関する研究で、メンバーは５期 10 名、６期７名。毎月２回の定期ミーティングは和やかに、そして熱い議論ができたそんな濃密な期間でしたね。

テーマ内容はさておいて…やはり思い出すのは１泊２日の視察旅行。岐阜県、京都市、滋賀県、長野県…どの視察も地域づくりに活躍する方々の話を直接聞き、成果を目で見るとても意義深いものでした。また、代表である私のまさかの遅刻、高速道路事故の渋滞、忘れ物等、数々のアクシデントも今となっては笑える思い出です。

5A、6A の特徴は、メンバーが幅広だったことです。20 代の学生から現役卒業世代まで、知らなかった者どうしが、同じテーブルを囲んで同じテーマについて研究するという機会は、この市民研究機構以外にはないのではないかと、そのように強く感じます。世代も様々、経験も様々、研究アプローチも様々。これこそ多様な市民社会の在り様ではないでしょうか。

市民研究機構も終了とお聞きしとても残念なのですが、研究から実践への今後の新たなステップアップを期待しています。最後に、私の鬼のような原稿催促におつきあい頂いたメンバーの皆様、いつも温かくサポートしてくださった川上ディレクターに感謝を申し上げます。

第６期Ｂグループ

新幹線と共に進む「多文化共生」社会の実現

ディレクター：八重澤美知子

研究員

・中川　武夫　・田村　謙治　・笠間　昭子

・菅村美知子　・森　　啓子　・櫻井由紀音

・新村　直子　・前田　和夫　・福田　昌泰

【募集要項】

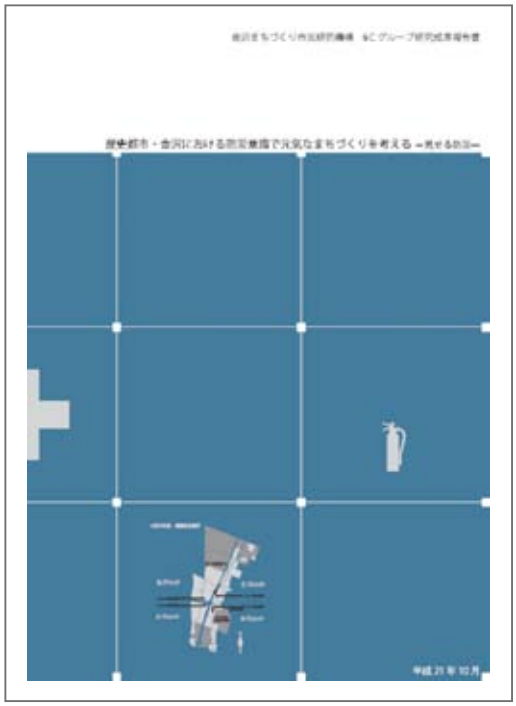
新幹線開業により、国内外から多くの方々が金沢に訪れ、伝統文化やまちなみ等、金沢らしさと出会う機会が増える。中でも、海外からの人々が金沢らしさを存分に味わうためには、金沢の文化やその背後にあるおもてなしの心に触れることが重要である。そのため、市民一人ひとりが金沢人としての自覚を持ち、誰もに優しい金沢を目指し、昔の良き金沢に現在の良き金沢をプラスして、「金沢世界都市構想」の実現化と取り組む必要がある。　具体的には、「観光は金沢」、「日本留学も金沢」となるように、地域全体での「多文化共生」の推進について研究する。

第６期活動風景

中国・蘇州市の観光客向けインフォメーションセンターの視察（Ｂグループ）

第６期Ｃグループ

歴史都市・金沢における防災意識で元気なまちづくりを考える



ディレクター：中森　　勉

研究員

・酒井　主計　・坂本　善昭　・吉島　　衛

・家山　　真　・土田　　満　・谷重　義行

・坂井志津江　・朝倉　直子

【募集要項】

伝統のあるまちには、防災に対する、資産（古くから培われた根強くたくましい住民の知恵や輪、用水の活用など）また、これを踏まえた、新たな工夫や取り組みがある一方で、これから対処すべき課題や問題点が存在している状況にある。

　防災への取り組みは、そのまちに生まれ育ってきた先人たちとの繋がりの中で捉えなければ、真にそのまちに有効なものとはならず、様々な世代が自分の住むまちに親しみ、また、まちを元気づけるまちづくりのひとつとして防災について研究する。

第６期Ｄグループ

国際観光都市を意識した「まちなみ」など金沢の魅力発信

ディレクター：飯島　泰裕

研究員

・杉江　裕子　・末栄　康則　・小松　　哲

・谷口　和男　・井上　克洋　・杉原美佐子

・神崎　淳子　・森　さゆり　・飯田　将史

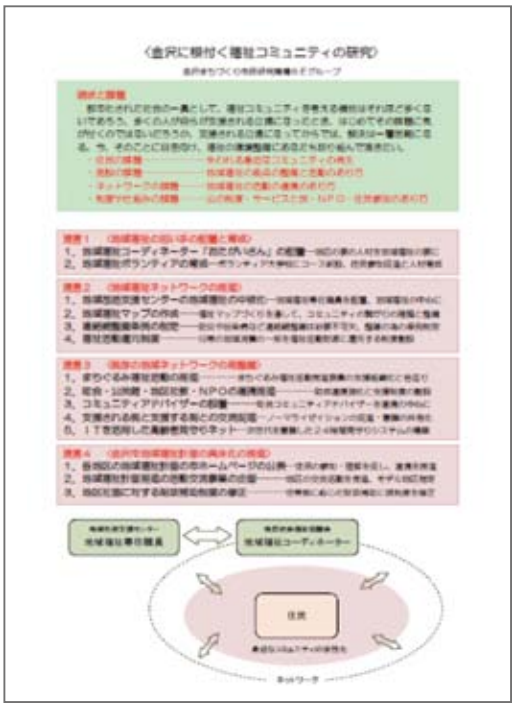
【募集要項】

北陸新幹線の開通を数年後に控え、団塊の世代などの県外観光客や、外国人観光客の受入れ態勢の整備が急務である。

　一方、金沢の魅力は、体験しないと分からないもの、文化的背景が分からないと理解できないものが多い。三文豪文学散策の道、用水、歴史の坂、寺院群と寺社保存樹林、惣構堀、石垣などの「まちなみ」を主に取り上げ、国内外への金沢の魅力発信について、情報通信技術（ICT）を活用した情報発信方策について研究する。

第６期Ｅグループ

金沢に根付く福祉コミュニティの研究



ディレクター：横山　壽一

研究員

・林　　正人　・山本　明彦　・三ツ田佳代

・赤須　治郎　・安嶋　是晴　・高野　　広

【募集要項】

介護保険制度や障害者自立支援法、後期高齢者医療制度など、新たな医療・福祉施策が制度化される一方で、それらの制度の意味や限界を見極め、それぞれの地域にふさわしい内容にどう組み替え具体化していくかが問われている。

　金沢に根付く福祉コミュニティを強化することにより、高齢者や障害を持つ人が安心して暮らし社会参加できる、ノーマライズされた住みよいまちづくりができないかを研究する。

第６期Ｆグループ

新旧の文化芸術情報を集積した「金沢アートマップ」の研究

ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・小森みゆき　・高橋　治希　・上田　陽子

・矩　　一浩

【募集要項】

北陸新幹線の開通を数年後に控え、県内では、「もてなし」の気風を高めるため、各種の試みが実施されつつある。

　市民が自分たちの町をより深く知り、観光客をより良くもてなすために、実際にまちを巡る際に必ず必要となる、新旧の文化芸術情報を集積した、住民にも観光客にも見やすく、使いやすい「金沢アートマップ」をデジタル・アナログの両面から研究する。

第６期Ｇグループ

金沢版脱マイカーライフ実現のための快適都市交通の研究

ディレクター：髙山　純一

研究員

・小滝　省市　・大竹　　滋　・細田　敬男
・石崎慎太郎　・穴口　智也　・轟　　直希
・今村　悠太　・福田　正輝　・形屋陽一郎
・藤田　雅久

【募集要項】

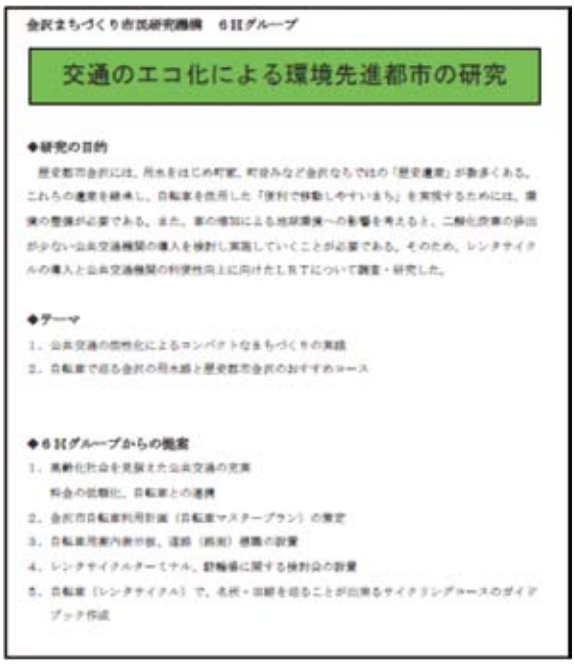
新幹線の開業を控え、平行在来線の地域基幹交通化や駅からの２次交通の充実が急務と言われている。こうした中、市民や来街者にとって便利で快適な交通システムの構築がよりいっそう重要であり、そのためには交通事業者のみならず、行政や企業、地域住民の努力と協力が不可欠である。そこで、利用者にとって選択可能な多様な交通手段の提供と魅力あるまちづくりを目標に、市民が過度なマイカー依存の生活から脱却し、便利で快適な脱マイカーライフを実現するための方策について研究する。

第６期活動風景

北鉄石川線の現状についての調査（馬替駅の通勤時間帯）（Ｇグループ）

第６期Ｈグループ

交通のエコ化による環境先進都市の研究


金沢まちづくり市民研究機構　６期グループ

交通のエコ化による環境先進都市の研究

◆研究の目的

歴史都市金沢には、用水をはじめ町家、町並みなど金沢ならではの「歴史遺産」が数多くある。これらの遺産を継承し、自転車を活用した「便利で移動しやすいまち」を実現するためには、環境の整備が必要である。また、車の増加による地球環境への影響を考えると、二酸化炭素の排出が少ない公共交通機関の導入を検討し実施していくことが必要である。そのため、レンタサイクルの導入と公共交通機関の利便性向上に向けたＢＲＴについて調査・研究した。

◆テーマ

1．公共交通の活性化によるコンパクトなまちづくりの実践
2．自転車で巡る金沢の用水路と歴史都市金沢のおすすめコース

◆６期グループからの提案

1．高齢化社会を見据えた公共交通の充実
　料金の低額化、自転車との連携
2．金沢市自転車利用計画（自転車マスタープラン）の策定
3．自転車用車内掛け台、道路（路肩）標識の設置
4．レンタサイクルターミナル、駐輪場に関する検討会の設置
5．自転車（レンタサイクル）で、名所・旧跡を巡ることが出来るサイクリングコースのガイドブック作成

ディレクター：三国　千秋

研究員

・中里　　茂　・道下　真也　・鴻　　章子
・永本洋一郎　・灰屋　英成　・浜崎　泰彦
・上野　祐子

【募集要項】

新幹線の開業を見据え、「便利で移動しやすいまち」を実現するためには、公共交通の利便性向上や歩ける環境、自転車利用環境の整備が必要である。また同時に、交通需要の増大による地球温暖化や省エネルギー化等の環境問題にも対処していかなければならない。例えば、ソウル市のＴ－ｍｏｎｅｙのような電子乗車券の導入や放置自転車を活用したレンタサイクルの整備、さらには環境税制の導入など、人・自然・まちにやさしい交通戦略が必要であり、交通のエコ化による環境先進都市の実現について研究する。

第６期活動風景

用水路沿いの道を自転車が利用しやすい道にするための研究（Ｈグループ）

第７期Ａグループ

子育てにやさしい都市・まちづくり環境の整備推進

ディレクター：川上　光彦

研究員

・高木　文代　・太田　光尋　・内田　　慧

・荻原　敏治　・片岸　将広　・桑原　直樹

・佐々木　佳　・部谷まどか　・伏見　　新

・森國　浩一

【募集要項】

本格的な少子高齢化社会に向けて、社会全体で子育てを支援するシステムの構築が必要である。本テーマでは、都市づくりやまちづくり環境の整備推進の一環として、都市計画、住宅、交通、まちづくりなどの観点から、子育てにやさしい環境のあり方や具体的な施策について調査研究する。

歴代研究員寄稿

回想文

高木　文代（７Ａ、８Ａ、９Ａ）

市民研究機構担当の皆様、３年間何もわからない私にいつも優しくご指導を頂き感謝しております。お陰様で７，８期の代表を無事務めることが出来ましたことにこれまた感謝しております。そして９期「高木さんは今回は参加されないのですか?応募の書類が出ていませんでしたが」と会議で声をかけていただいたお陰様で９期に参加できました。そして金沢市との協働のコミュニティカフェが誕生しました。川上先生が「高木さんこそが市民研究会の成功者だ」と喜んで下さいました。とっても嬉しかったです。小堀先生も御空の上で喜んで下さっています。市民研究機構の担当の皆様の大きな金沢を想う気持ちで続いたまちづくり研究機構です。少しでも恩返しが出来たなら幸せです。

川上ファミリーという素晴らしい家族にも出会えました。金沢市の皆様の貴重な税金でたくさんの勉強をさせていただけましたことに心より感謝しております。この市民研究会で研究しチャレンジ協働事業の助成金で立ち上がりました「コミュニティカフェあひるの子」を市民の皆様の市政勉強会の場所として活用していただけることを楽しみにお待ちしております。

第７期Ｂグループ

金沢世界都市構想における多文化共生社会の実現に向けて

ディレクター：八重澤美知子

研究員

・毛利　泰江　・前田　和夫　・笠間　昭子

・櫻井由紀音　・田村　謙治　・鈴木　順子

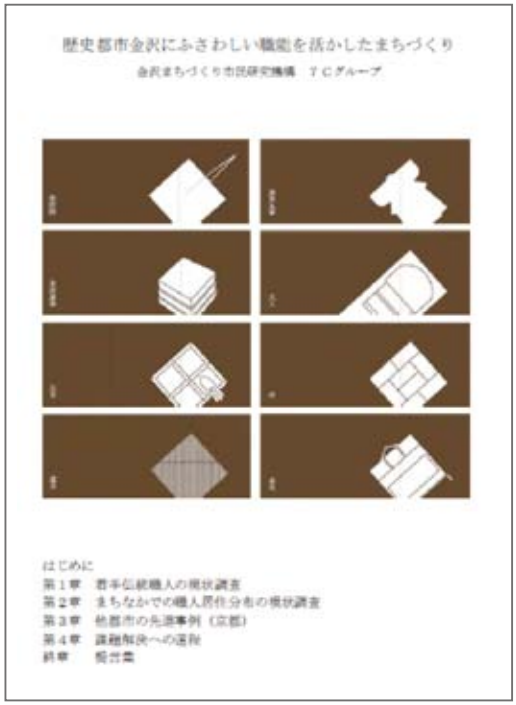
・中村　英樹　・山崎麻佑子　・大島　　優

【募集要項】

金沢市では、経済・観光・行政などあらゆる面において、市民ひとり一人に、今後ますます国際人としての「多様性」が必要とされる。増加傾向の外国人留学生や短期滞在者に加えて、北陸新幹線の開業等により、外国人観光客をはじめとする交流人口の一層の増加など、文化的背景を異にする人々が、相互の文化や生活習慣などを尊重し、仲良く快適に生活するために、様々な文化を理解するとともに新しいコミュニティのあり方を模索して行かなければならない。「世界の中で独特の輝きを放つ都市づくり」を目指す金沢の更なる国際化に向け、「金沢らしさ」を生かした多文化共生のコミュニティづくりを検討したい。

第７期Ｃグループ

歴史都市金沢にふさわしい職能を活かしたまちづくり



ディレクター：中森　　勉

研究員

・松村　謙一　・橋本　浩司　・朝倉　直子

・吉島　　衛　・坂本　善昭　・髙村　　武

・谷重　義行　・土田　　満

【募集要項】

歴史都市金沢には、藩政期から受け継がれた多様な職人技能があることから、武家屋敷や町家、茶室などの修復が行われ、伝統的なまちなみが保全されている。しかし、これらの職人技能は、まちなかで見られない状況にある。

　そこで、歴史都市の認定を受けたことを機に、住・職が一体となった職人技能の調査発掘を行うとともに、金沢に根付く、ものづくりや手仕事などの職人技能を活かしたまちなみや都市空間の維持、防災、防犯といった安全性の維持などの仕組みについて研究する。

第７期Ｄグループ

北陸新幹線の金沢開業を見据え、金沢の和風旅館の魅力発信を考える

ディレクター：井上　克洋

研究員

・神崎　淳子　・儀谷　雅子　・酒井　康代

・佐々木絢也　・美多　幸夫　・吉田　　洋

【募集要項】

北陸新幹線の開業によって、金沢への旅行者は今後増加することが見込まれる。旅行者の増加は、世界都市としての「金沢の魅力」を国内外に伝える好機ではあるが、生活文化そのものである「金沢の魅力」を短期の滞在者に理解し堪能してもらうことは容易ではない。そこでここでは金沢の生活文化の中から、旅行者の多くが関わり得る和風旅館に焦点を当て、国内外の旅行者に対して、金沢の和風旅館の魅力はどこにあるのか、そしてその魅力を国内外の旅行者に伝えるにはどうすればいいかについて研究をすすめる。

第７期Ｆグループ

市民と行政の協働による、地域に根ざしたアートの研究

ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・小森みゆき　・上田　陽子　・下崎　義宏

・武野　一雄　・永原　忠和　・谷口　和男

・西川　幸洋　・三原　亮一　・今井　　慎

・田中　博志

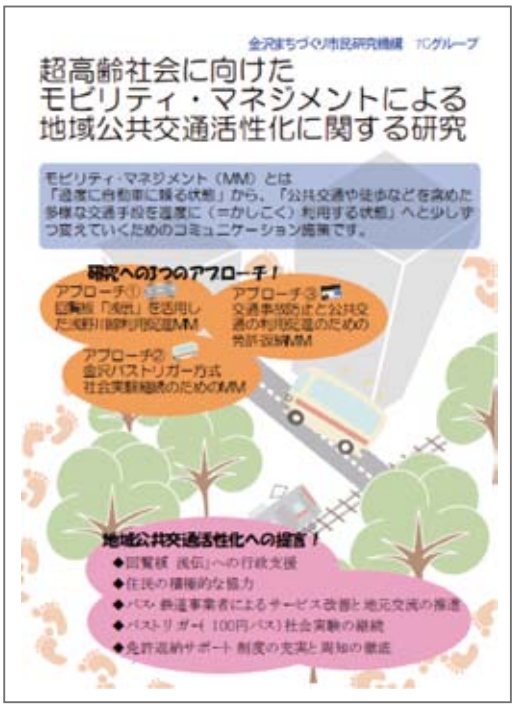
【募集要項】

金沢が世界の中で存在感を高めるには、金沢の文化力を十分に生かし、市民による芸術・文化活動を活発化させることが必要である。

　そこで市民、行政、その間をつなぐＮＰＯが協働し、伝統、造形、音楽、食などさまざまなジャンルを越えたコミュニケーションから生み出される、金沢ならではのアートを研究する。

第７期Ｇグループ

超高齢社会に向けたモビリティ・マネジメントによる地域公共交通活性化に関する研究



ディレクター：髙山　純一

研究員

・館農　勝彦　・大竹　　滋　・小滝　省市

・今村　悠太　・形屋陽一郎　・中井　惇弥

・稲田　裕介　・中野　晃太　・岡本　裕也

【募集要項】

少子高齢化が急激に進む中、金沢でも高度成長期に発達した郊外の住宅地やその周辺、あるいは街中に住む高齢者の交通行動の負荷が課題となってきている。この課題に対する一つの対策として、金沢市では中心市街地の細街路を運行する「金沢ふらっとバス」を平成１１年から導入している。しかし、郊外に居住する高齢者（特に、クルマに乗れない交通弱者）への対策は未だ十分な状況ではない。今後さらに、高齢化が進む中で郊外居住者の交通手段の確保は重要な課題である。また、この課題は金沢市域だけの問題ではなく、周辺市町においても同様である。そこで、金沢市のみならず、周辺市町を含めた地域公共交通活性化の課題について、そのあり方、ならびにその活性化方策をモビリティマネジメント（MM）の考え方により検討する

歴代研究員寄稿

『私が市民力を養った有意義な４年間』
小滝　省市（５Ｇ、６Ｇ、７Ｇ、８Ｇ）

私にとって、市民研での４年間は、「市民力」を養った有意義な期間だったと思います。「脱マイカー」をテーマとした年、車以外の交通手段を選択するための社会のあり方について真剣に考えましたが、なかなか妙案が思い浮かびませんでした。そして、１日だけ会社を休み、「脱マイカーを考える日」を設けました。結果、私自身が電車通勤をはじめたきっかけを思い返し、「まずは身近な日常行動においてマイカー以外の選択をしていただく」ことが重要ではないか、と考えました。仕事以外で、しかも公共のために真剣に考える日を設けるなんて、それまで一度もなかったような気がします。たった１日のことですが、私が公益を意識した重要な日でした。

最後に、関わった方々へ。様々な角度から有意義な助言をしてくださった高山先生、アンケート調査のために大学で準備や議論に付き合ってくれた学生さん、公共交通に関して熱い思いを語ってくれた市民団体の方、視察やヒアリング調査などに協力していただいた行政や交通事業者の方々、報告書の取りまとめやパネル作りに尽力してくれた学生さん、４年間の活動において常に支えていただいた大竹さん・・・多くの方と出会い、そして様々な考え方、熱い思いに触れることが出来、私の人生にプラスになった、と実感しております。ありがとうございました。

第７期Ｈグループ

金沢市におけるコンパクトなまちづくりのための自転車利用促進の研究

ディレクター：三国　千秋

研究員

・村中　泰雄　・河村　浩一　・所村　敬治

・小原　将平　・道下　真也　・坂本　登照

・中村健二郎　・登米　　航

【募集要項】

自転車は環境の面で地球温暖化防止に役立つだけでなく、健康増進や経済性の面からも注目されている。新幹線開業後の金沢において、観光客の市内回遊性を高めるためにも、また将来の少子高齢化社会にそなえたコンパクトなまちづくりのためにも、自転車は徒歩や公共交通と並んで重要な移動手段である。

　本研究では、金沢市における自転車利用促進のために、自転車道ネットワークや駐輪場、レンタサイクルなどの整備に加えて、歩行者や自転車の交通安全教育、自転車の無灯火防止対策など、自転車マナー向上についても研究する。

第７期活動風景

自転車利用促進のための高校生への自転車交通安全レクチャーの開催（Ｈグループ）

第８期Ａグループ

子育てにやさしい都市・まちづくり環境の整備推進

ディレクター：川上　光彦

研究員

・高木　文代　・太田　光尋　・大西　宏樹
・荻原　敏治　・片岸　将広　・黒井　秀信
・坂井志津江　・部谷まどか　・松本ゆかり
・森國　浩一

【募集要項】

金沢市を子育てにやさしく子育てのしやすい都市にしていくために、地域社会全体で子育てを支援する環境の整備やシステムの構築が必要である。本テーマでは、都市計画、住宅、交通、公園、まちづくりなどの観点から、子育てにやさしい環境や施設整備のあり方及び具体的な施策について調査研究する。内容は、市内における子育て環境の実態調査、先進国や先進都市との比較、市内におけるこれまでの施策や施設の整備と運営の実態、利用者の需要や意識などについて調査分析し、市民、企業、行政、および、ＮＰＯなどの各種団体の役割について提言する。

歴代研究員寄稿

市民研と過ごした３年間を振り返って

部谷　まどか（７Ａ、８Ａ、９Ａ）

市内の建設コンサルタントに就職した2009年。ご縁あって、金沢まちづくり市民研究機構で３年間にわたり、川上先生にご指導いただくこととなりました。７期･8期は「子育て」､9期は「コミュニティカフェ」とどちらも『コミュニティ』が軸となるテーマだったこともあり、アットホームなメンバーとともに、研究活動を進めることができました。

ディレクターから直接ご指導いただけることで、研究活動そのものの充実はもちろん、アウトプットの場面で、私たちの自信を支えてくださる大きな存在になっていました。また、「金沢市まちづくり市民研究機構で研究をしておりまして…」と言えることで、事例収集や視察では、自主研究では届かない人や場所、見ることができない夢も描けるような活動ができました。

「市民参加」や「住民主体のまちづくり」という言葉がありますが、住民であれ、行政であれ、人が動き出すスタートは「関心を持つこと」だと思います。本研究機構は「関心をもつ人」の集まりであり、研究会は互いに触発しあう機会でした。そして、このしくみ自体が、市民や情報をつなぐネットワークとなっており、９年間重ねてきたまちづくり・人育ての成果なのだと思います。ここから生まれた多くの卒業生が、これからも金沢の更なるパワーアップを支えていくことと思います。

市民研での出会いや経験は、まちづくりに関わる仕事をする私をいつも勇気づけてくれました。素敵なご縁をいただけたこと、本当に感謝しております。ありがとうございました。

第８期Ｂグループ

来日する外国人のための金沢文化体験と相互交流プランの開発

ディレクター：八重澤美知子

研究員

・菅村美知子　・蔡　　旭再　・介田　智子
・佐原　康介　・静岡　佑紀　・中土理恵子
・西尾　健二　・劉　　丹華

【募集要項】

「世界都市　金沢」の構想を理解し、それを推進して行くためには、観光や学習などの目的で海外から来る人々が金沢市民とともに、互いの文化や習慣を尊重し合い、満足の行く時間と空間とを共有する事が出発点となろう。海外から金沢を訪れ、一定の期間をこの地域で過ごす／暮らす諸外国の人々に対して、金沢の文化力を理解・体験できるプログラムの開発と、帰国後も含めた継続的な相互交流のシステムについて、多文化共生の視点から検討する。

第８期Ｃグループ

次の世代につながる金沢の伝統的な職業をはぐくむ場＝「ものづくりするまち」について考える

ディレクター：中森　　勉

研究員

・坂本　善昭　・橋本　浩司　・朝倉　直子
・吉島　　衛　・髙村　　武　・谷重　義行
・土田　　満　・松村　謙一

【募集要項】

かつての金沢の民衆力というものをみるとき、まちなかに職住一体化した伝統的職人らが、まちと有機的に結び、日常のコモンセンスを一定レベルに保つ役割を果たしてきたと言えます。しかし、今日的にみればまちなかの空洞化によりその結びつきは弱まっています。

そこで本研究の目的は、まちに機能する職人力と民衆力を連携させた『ものづくり工房』が連なる「ものづくりするまち」について探究することにします。

第８期Ｄグループ

欧州に学ぶ、歩いて巡れる歴史都市金沢の生活と観光

ディレクター：井上　克洋

研究員

・吉田　　洋　・北川　文男　・小林　弘子

・下崎　義宏　・前田　俊也　・森　　啓子

・笠間　昭子

【募集要項】

欧州には何世紀にもわたり繁栄を続けてきた文化都市が数多く存在している。これら文化都市の多くに歴史的建造物や伝統文化及び生活が脈々と継承され続けてきたのは、そこに住む市民がその重要性を認識し、行政が継承や保存を支援してきたからに他ならない。そこで本グループでは、欧州の文化都市の何が人を惹きつけ、それを市民がどのように利活用し、行政が文化政策として何をしてきたのかを調査・研究し、「歴史体感」および観光という観点から、「歩いて巡れる文化歴史都市」としての金沢を如何にプロデュースしていけるかを提案する。

歴代研究員寄稿

「ふりかえって」
前田　俊也（８Ｄ、９Ｄ）

今から２年半ほど前、金沢市高砂大学院に在籍していたころ、市の担当者がこられ「金沢まちづくり市民研究機構」について説明された。すでに７年経過し８年目の募集であるとのこと。今迄このような研究機構があることを全く知らなかった。募集要項の研究テーマを見ると「欧州に学ぶ歩いて巡れる歴史都市金沢の生活と観光」が目にとまった。観光ボランティアをしている私にとって少しでも役立てばと思いメンバーとなった。

新幹線開業を考えると多くの観光客が初めて金沢駅に降り、頼りになるのがなんといっても観光案内所であることに間違いない。そこで現在の観光案内所を調査し、スイス・ドイツ・フランスの観光施設などを参考に改善できるものは改善しさらに充実するように提案した（８期８Ｄグループの研究成果報告書をご参照下さい）。

２年目の９期は研究員も 13 人の大世帯となり代表という大役を命ぜられた。研究テーマは「金沢の魅力を活かしたこれからの観光とまちづくり」となり、私は他のメンバーとまちなかに多く見られるパブリックアートと各施設が保有している絵画を調査し、見て歩きマップを提案した。中でも金沢市文化ホール棟でイベントの時には「緞帳　白山と手取川(高光一也)」「緞帳　兼六讃歌（西山英雄)」、金沢歌劇座ホール１階ロビーで「爽（村田省蔵)」「野牛とニンフ（蓮他修吾郎)」「無言の会話（円地信二)」が見られる。すばらしい銘品。これらも調査してわかった事。市民はもちろん観光客の人にもイベントの時是非見てほしい。

９Ｄは大世帯ながら井上ディレクターの指導のもと研究員一人一人が積極的に研究され、無事発表会を終え報告書が出来たことに感謝しています。今となっては、冬の雪の中市内の彫刻等をさがし調査した事がなつかしく思い出されます。鈴木大拙館近くにある大拙像が雪のマフラーをしている写真もとれました。この研究に参加したことにより多くの人との出合いがあり自分自身の勉強にもなりました。これからは観光ボランティアで大いに生かし、観光客がよろこんでもらえればと思っています。ありがとうございました。

第８期Ｅグループ

福祉でつくる安心できるまちのあり方

ディレクター：内　　慶瑞

研究員

・高瀬　直己　・相良多喜子　・中島　弘晶
・奥村　佳代　・川上　芳雄　・川本　　佳
・谷口　好美　・平松　知子　・松原　和代
・吉田　正俊

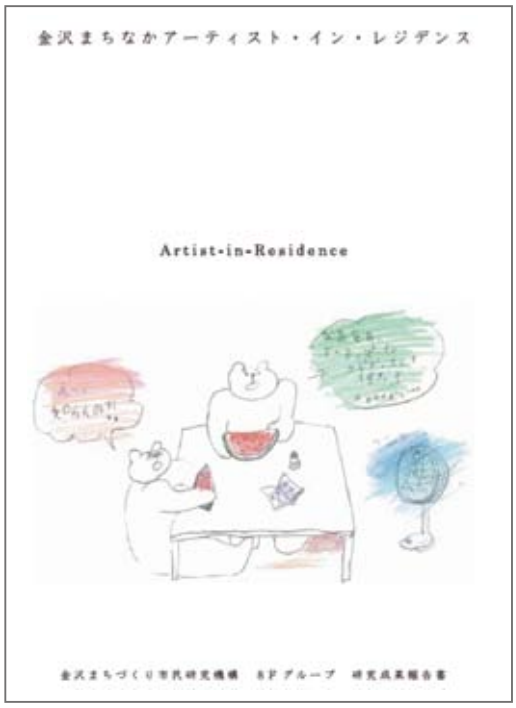
【募集要項】

地域や家庭から孤立してしまうひとり暮らし高齢者や認知症高齢者、障がい者、こどもが増加している。これらの問題に対応するには、公的（フォーマル）サービスの供給だけでは限界があり、私的（インフォーマル）サービスの充実が求められてくる。

近隣住民やボランティアによる要援護者見守りネットワーク活動やＮＰＯ・企業による社会貢献活動の活性化、地域で遊び学び育つこどもの支援、高齢者への情報周知及び緊急時情報キャッチシステムの構築など、すべての住民が安心して暮らせるための方策について、地域で福祉をつくる視点から考える。

第８期Ｆグループ

市内中心部空家の活用によるまちなかの創造ネットワークの形成



ディレクター：真鍋　淳朗

研究員

・小森みゆき　・上田　陽子　・奥　　祐司
・白土　貴久　・武野　一雄　・田中　博志
・谷口　和男　・永原　忠和　・西川　幸洋
・村中　泰雄　・米沢　慎祐

【募集要項】

ユネスコの認定を受けた金沢が、今後創造的に発展して行くためには創造産業に関わるソフト・ハード両面の充実が必要である。そこで、金沢市中心部の空家 (町家を含む)、空店舗における国内外の若いアーティスト・工芸作家が集い、競い合い、発表出来るアトリエ等の滞在制作施設 (アーティスト・イン・レジデンス) としての活用策について検討を行い、アートによるまちなかの創造ネットワークの形成を研究し、その都市再生の効果を検証する。

第８期Ｇグループ

歩行者・公共交通を中心とした交通まちづくりのためのモビリティ・マネジメント研究

ディレクター：高山　純一

研究員

・大竹　　滋　・形屋陽一郎　・林　　芳史

・山本慎之介　・上畑雄太郎　・東　　寛和

・藤田　雅久　・中野　晃太　・小滝　省市

【募集要項】

誰もが快適で、安心して暮らせるまちづくりが求められており、平成 19 年３月に歩行者と公共交通を優先した「新金沢交通戦略」が策定された。しかし，公共交通の利用者数の減少傾向に歯止めがかからず，このまま公共交通利用者の減少が続けば，ますます交通の不便なまちになってしまう。この状況を打開するためには，交通事業者の取り組みだけでは不十分であり，利用者である地域住民（市民）自らが公共交通に関心をもつと同時に利用促進に努力することが必要である。第８期では，モビリティ・マネジメント手法を発展させて公共交通の利用促進をめざしたい。

歴代研究員寄稿

市民研究機構の活動を通じて

形屋　陽一郎（６Ｇ、７Ｇ、８Ｇ、９Ｇ）

市民研究機構の活動を終えた率直な感想として、代表を務めさせていただいた第９期の報告書の提出と発表を終えることができたことを嬉しく思っています。

私は、第６期から市民研究機構に参加し、「交通まちづくり」を主な分野とするＧグループで、金沢大学の高山先生のご指導をいただきながら、第９期までの４期にわたって活動に参加しました。各研究員は、仕事や学業、家庭を抱えながらの活動してきたこともあり、当初の予定通りに活動できないことも多々ありました。しかし、職種の異なる方や学生など、普段意見を交わすことのできない方々と共通のテーマについて議論し、活動できたことは、とても有意義な経験だったと感じています。

Ｇグループでは主な研究内容として、「公共交通の利用促進」を取り上げ、他都市への視察や地域住民の方々へアンケート、ワークショップを通じて地域の意見を踏まえながら研究を進めてきました。これは、高齢社会の進行による公共交通へのニーズの高まりや、北陸新幹線の開業が間近に迫った金沢において、今後、議論を深めるべき重要なテーマの一つであると認識しています。

今後の金沢のまちづくりにおいて、これらの市民研究機構での活動の成果が少しでも活かされることがあれば、大変嬉しく思います。

終わりに、ディレクターとして研究活動を支えてくださった金沢大学の高山教授をはじめ、ともに活動した歴代の研究員の皆様方に心から感謝致します。

第８期Ｈグループ

エコ・福祉・利便性促進に対応した交通機関の検討～金沢における自転車交通発展の可能性

ディレクター：三国　千秋
研究員
・島崎　淳一　・河村　浩一　・坂本　登照
・谷川　仁弘

【募集要項】
自転車は「エコ・福祉・利便性」の点からも、近距離の移動に適しています。近年自転車がブームになっていますが、自転車利用者が増えることは、それだけ事故につながる可能性も多く、車の事故が減少しているのに対して、自転車による交通事故は増加しています。安全で快適な自転車交通のために、必要なインフラ整備や交通安全教育、公共交通との連携など、金沢の町なか交通について総合的な研究を行います。

歴代研究員寄稿

金沢まちづくり研究機構へ参加して
島崎　淳一（８Ｈ、９Ｈ）

北陸大学の三国教授、８期と９期一緒に研究したＨグループ研究員の仲間、そして金沢市の研究機構ご担当者の皆様、各位に謝辞を述べたいと思います。皆さま方のご協力なくして、グループの代表を務める事はできなかったと思います。代表としては至らぬ点が多くご迷惑をおかけしたと思いますが、皆さま方のご協力にて良い研究ができ研究成果の発表内容も素晴らしかったと思います。ここに厚くお礼申し上げます、ありがとうございました。

さて私は、金沢市のようなコンパクトな都市部を持つ都市は、現状の自動車だけに頼った交通社会を見直し、自転車の走行空間をもっと設置する必要があるとの考えから、金沢まちづくり市民研究機構へ参加させていただきました。金沢市は、自転車走行空間の確保に向けて、全国に先駆けて自転車走行指導帯を生み出した都市であります。今後も自転車走行空間を市内各所へ積極的に設置し、自転車交通網を構築して、自動車だけに頼ることのない、自転車を有効活用した日本で一番進んだ交通社会を目指していただきたいと思います。

金沢市まちづくり市民研究機構は、私達市民より提案された研究テーマに沿って市民が研究員としてボランティアで研究活動を行い、市民が研究成果をまとめて金沢市へ提案する、まさしく市民の市民による市民の為の研究機構でした。研究活動には行政が介入することなくあくまでも黒子に徹して、各研究グループがディレクターの元に１年間独自に研究を深めていくというスタイルは、行政にとって都合の良い事ばかりではなかっただろうと思いますが、研究する側からすれば理想的な研究体制だったと思います。

誠に残念でありますが、金沢まちづくり研究機構は活動を終了することとなりました。

２年間という長いようで短い間でしたが、充実した研究を行えたと思っております。

第９期Ａグループ

コミュニティカフェ活動による市民協働のまちづくりの促進

ディレクター：川上　光彦

研究員

・加茂谷慎治　・部谷まどか　・足立　章江
・荒井　聖人　・大西　宏樹　・荻原　敏治
・高木　文代　・中谷　　徹　・新田川貴之
・春名　千枝　・松谷　圭祐　・矢後　香織

【募集要項】

少子高齢化の進行や単身世帯の増加などにより、従来の地域社会が果してきた役割がとても弱くなっている。一方、地域における協働、連帯、互助などについての新しい取り組みが増えている。ここでは、金沢市において市民協働のまちづくりを推進するため、コミュニティカフェ活動について、全国的な先行事例に学びつつ、子育て支援、高齢者の在宅支援、若い世代の交流支援、障がいを持つ人の支援、中山間地とまちとの交流など、地域コミュニティを再生、充実させることについて研究、提案する。

歴代研究員寄稿

人と人がつながる仕組みづくりを

加茂谷　慎治（９Ａ）

東日本大震災をきっかけに「絆」という文字を目にする機会が増えました。地域における人と人のつながり、家族の結びつき、学校や職場における仲間との思いやりが見直されるようになったのです。「社会における人間関係が希薄になってきた」と言われる一方で、フェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアを通して、「つながり」を求める人も増えています。

そんな中、「人と人がつながる仕組みづくり」に興味を抱き、まちづくり研究機構が開催する「コミュニティカフェ活動による市民協働のまちづくりの促進」に参加しました。メンバーは、「コミュニティカフェ」という定義を探り、コミュニティカフェが、「人と人のつながり」の場となる可能性を求めて県外にまで足を延ばし、コミュニティカフェを運営する方のヒアリングを通して情報を集めました。研究成果は、「コミュニティカフェによる豊かなまちづくり」と題する冊子にまとめられました。冊子には、多くの方がコミュニティカフェを知り、足を運んでくれることでつながってくれればという思いがこめられたのです。

カフェを運営する方、運営を考える方、利用したい方、さまざまな立場の皆さんに呼びかけ、「コミュニティカフェサミット in 金沢」が開催される運びとなりました。集まった皆さんと意見を交わし、情報を共有し、「つながる」場づくりの実践となりました。機構の活動は終止符を打ちますが、金沢市にはこれからも行政主導ではなく、市民の声が反映される「人と人がつながる場づくり」を実現することが求められています。

ディレクターをご担当いただいた川上先生には、フィードワークへの参加をはじめ、研究活動にご指導ご助言をいただき厚く御礼申し上げます。

２年間という長いようで短い間でしたが、充実した研究を行えたと思っております。

第９期Ｂグループ

伝統と現代が交差する「金沢文化」の発信と多文化共生の推進

ディレクター：八重澤美知子

研究員

・菅村美知子　・安井　史郎　・西出　　隆

・日置　京子　・鈴木　順子　・森　　啓子

・張　　生偉　・静岡　佑紀　・中土理恵子

・介田　智子

【募集要項】

長い時間をかけて継承されて来た金沢の伝統文化は、国内外からの観光客を魅了し、留学生や外国籍の人々が金沢で暮らすようになってきた。しかし近年、金沢城や兼六園、県立美術館など伝統文化の集積地に、金沢２１世紀美術館が出現し、金沢は伝統と現代の新旧文化が共存するまちと評されるようになった。アニメーションや漫画など現代日本の文化は、「クールジャパン」（カッコイイ日本）として広く世界に発信されている。本グループでは、これらの研究を進めることで、伝統と現代が交差する「金沢文化」による国内外の交流を深め、多文化共生の推進につなげたい。

歴代研究員寄稿

Ｂグループに参加して

介田　智子（８Ｂ、９Ｂ）

研究員としての２年間で、私は、金沢市内で行われる行事や展示会に参加するだけではなく、海外に出ての研究活動も行いました。市内では、金沢大学留学生センターが主催する「いしかわ金沢学」に参加して海外に発信できる金沢の魅力を学んだり、留学生寮主催の地域住民との交流を目的としたお祭りで、日本人と外国人の交流について学んだりしました。また、アメリカやリトアニア、イギリスやメキシコなどに、１週間の短期滞在から６ヶ月間の留学をしました。これらの経験から、「金沢」を市民としてだけではなく、外からの視点でもみることができるようになりました。

8B・9B グループの市民研究員は、年齢をはじめ異なるバックグラウンドを持ったメンバーが多く、興味の対象も多様でした。定期的に集まり、それぞれの研究の進み具合を報告しあったり、それぞれの活動について話し合ったりもしました。それまで大学の中にとどまっていた私が、学外の方々と一緒に研究活動を行ったことで、視野を大きく広めることができました。

２年間、大学外で市民研究員として活動したことで、多くのことを学び、いろいろな方々と知り合うことができました。これらの経験を生かして、これから「金沢」の発展のために積極的に活動していきたいと思います。

（なお、「IMF（国際通貨基金）英文エッセイコンテスト 2012」で最優秀賞を受賞した介田さんは、IMF の H.P. において、金沢まちづくり市民研究機構研究員としてのキャリアを海外に紹介している）

第９期Ｃグループ

楽しく・安全に・歩いて買ってまわれる中心商店街

ディレクター：内田奈芳美

研究員

・縄　　裕介　・巻　駿之介　・笠間　昭子

・小嶋　久之　・清水沙友里

【募集要項】

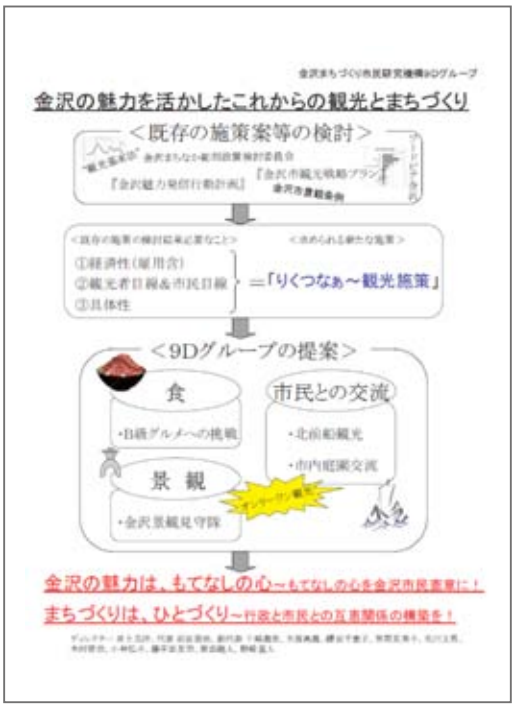
中心市街地の商店街は歩いて買いまわる楽しさがある。また、高齢化社会にはすぐ歩いて買い物に行けるような、「コンパクトシティ」の考え方も重要である。何か災害があった場合も、車にだけ頼るスプロールした都市では、ガソリン不足などによる混乱は避けられない。多様な店で多様なものを買ってまわれる中心商店街を考えることは、住んでいるまちの魅力を向上させ、持続可能な都市づくりにつながるものである。商店街をネットワークとして考えた、歩いてまわれる中心商店街のまちづくりのあり方について研究を行う。

第９期活動風景

コミュニティカフェに取り組む人たちの繋がりを強化するため、コミュニティカフェサミット in 金沢を開催（Ａグループ）

第９期Ｄグループ

金沢の魅力を活かしたこれからの観光とまちづくり



ディレクター：井上　克洋

研究員

・前田　俊也　・下崎　義宏　・木村　啓治
・藤平田友市　・新田　龍人　・笠間芙美子
・小林　弘子　・大西　高義　・北川　文男
・野崎　重人　・纓田千恵子

【募集要項】

観光が地域経済の活性化や雇用促進に繋がる産業として、国の主要な経済成長分野に位置づけられるようになって久しい。しかし観光は同時に、他地域の人々との交流や、郷土の魅力再発見、郷土意識の形成などを通して、地域文化の活性化に大きな役割を果たしてきた。本グループは観光が内包している産業・文化の両面の調和をはかりながら、人が何度も金沢へ来訪したくなる仕組づくりを提案する。既存の伝統文化に加え、食、アート、文学、景観、庭園、市民との交流等に焦点をあて、金沢の魅力を活かしたこれからの観光とまちづくりを考えたい。

歴代研究員寄稿

ありがとう、“市民研究”

小林　弘子（８Ｄ、９Ｄ）

平成 22 年の７月、図書館の広報コーナーに置かれていた１枚のチラシを手にし、私は「金沢まちづくり市民研究機構」という制度を初めて知りました。「研究機構」という何か難しそうなイメージを、「市民」の２文字が和らげている・・。そんな第一印象を今もなつかしく思い出します。そして「市民研究員募集要項」を読んでいくうちに、グループ活動の楽しさが頭に浮かんできて、出来れば自分も応募したいと心が動いたのでした。受付の締め切りは１日後に迫っていましたが、前日にこのチラシと出会ったのも何かの縁とばかりに、大急ぎで作文を書き、翌日市役所の担当窓口へ応募申込書を提出した私は、久しぶりに新しいことにチャレンジするような期待感で、わくわくしていました。

お世話になった２年間を通して、私が取り組んだ研究テーマは「観光」です。ディレクターの井上克洋先生をはじめグループのメンバーは多士済々で、それぞれの社会経験を踏まえての豊富な話題は、まさに文殊の知恵。月に２回、金曜日夜の集会は、私にとってまことに刺激的で恰好のリフレッシュタイムだったと振り返っております。フィールドワークで京都の街を歩き市役所で観光担当の方々と意見交換できたことも、貴重な体験となりました。私にはこれからが本番という時、本機構の終了は残念でなりませんが、１枚のチラシをきっかけに良き仲間と出会えた「市民研究」に、心から感謝しています。

第９期Ｅグループ

福祉でつくる安心できるまちのあり方

ディレクター：内　　慶瑞

研究員

・奥村　佳代　・小島万莉菜　・折池　紗綾

・松井　　繁　・水野奈央子

【募集要項】

都市部を中心に広がりつつある「無縁社会」。地縁が崩壊し、住民のコミュニティへの帰属感も薄くなり、旧来日本のコミュニティが有した相互扶助機能が弱まりつつある。同時に、地域や家庭から孤立するひとり暮らし高齢者や認知症高齢者、障がい者、こどもも増加している。これら見逃すことのできない諸問題に対応するためには、行政と民間の協働システムづくりが急がれる。本グループでは、近隣住民らによる要援護者見守りネットワーク活動、放課後保育などの子育て支援策、福祉教育の推進方法、そして災害弱者への支援ボランティア策など、官民協働による新しい公共福祉のあり方について研究する。

歴代研究員寄稿

８期、９期の思い出

奥村　佳代（８Ｅ、９Ｅ）

８～９期の２期に亘り、まちづくり市民研究機構に関わらせていただきました。９期では、代表も務めさせていただきました。

８期は、経験豊富な方が多く、研究以外のことでも勉強になりました。しかし、初めての事ばかりで、不安と焦りが先行し、「なんとか終わった」印象でした。最後のまとめや研究発表の準備なども、当時学生であった研究員に任せっきりであったので、申し訳なく思うとともに、本当にありがたかったなと今でも感じています。

９期は研究員が５人と少人数でしたが、少人数ならこそ団結できてよかったと感じています。５人中４人が女性ということもあり、研究会はいつもにぎやかでした。研究会の後、花見に出かけたこともありました。

特に、研究員とディレクターの先生とで大阪へ視察に行けたことが、とても印象に残っています。経費をなるべく抑えようと高速バスで移動し、安価なビジネスホテルの窓のない部屋に宿泊するなど、条件は決してよくはなかったのですが、なぜか楽しく、なぜかまた行きたいと思ってしまいました。研究が終わった後も、「また、みんなで集まりたいね」と約束をしています。是非、実現したいと思います。

職種や世代、地域を超えてたくさんの人と関わることができた研究会でした。そして、改めて地域福祉の原点は「人との関わり」にあるのだと感じています。

第９期Ｆグループ

アートによる都市コミュニティの再生

アートによる都市コミュニティの再生

金沢まちづくり市民研究機構　９Ｆグループ

金沢には、ユネスコ創造都市クラフト部門登録を受け、新たなまちづくりのきっかけが生まれつつある。アートや工芸の作家がまちなかに居住するためのアトリエとしての町家（タウンハウス）と新しいライフスタイルにマッチした未来の街を提案し、コミュニティを再生する社会実験を始めたい。創造都市の魅力を活かし、まちなかにある空き町家や茶室、路地などの都市遺産を活用し、近未来型まちなか居住の提案に結びつけ、また地域コミュニティを醸成するための環境づくりを都市デザインや建築デザインの側面からも研究し、政策提言に結びつけたい

第１章「実践事例の体験から見た考察」

今回の研究テーマである「アートによる都市コミュニティの再生」は、手探り状態では、実践が難しい課題といえる。金沢で実際に行っている事例を実際に経験し、今後の可能性や課題を導き出す。

第２章「招いぢの重要性（京都の事例から）」

「創造都市」形成・発展のためには、教育・美術館などのインフラの充実だけでその実現は難しい。創造性の担い手となる「人材」がそこに生活し、創造的な活動を行なう。また、これら人材を支えるコミュニティの存在がかかせない。

第３章「アートに特化したテーマ・コミュニティの提案」

・"金沢のアート"に特化したテーマ・コミュニティ

・"金沢のアート"の今と昔

・"Kanazawa Art"支援プランに向けて

第４章「金沢市南部の街並景観の魅力と保存・活用策」

・金沢市南部に残存する街並景（東茶屋・東茶屋・長坂・野田 など）の景観保全

・「伝統的暮らし文化を表現する集落保存地区」とオアシス的保存として再生整備

・「地方創生住民や外来者などへの新しい集落保存の一部提供や金沢のアート集積保存としての野田山墓地の再評価

（天満宮付近に暮らし、金沢市の中心市街地、北市市場跡）　2012.3.8　報告：坂本 英之

ディレクター：坂本　英之

研究員

・吉田　　洋　・西川　幸洋　・中山　利恵

・白土　貴久　・武野　一雄　・米沢　慎祐

・安藤　貴文

【募集要項】

金沢には、ユネスコ創造都市クラフト部門登録を受け、新たなまちづくりのきっかけが生まれつつある。アートや工芸の作家がまちなかに居住するためのアトリエとしての町家（タウンハウス）と新しいライフスタイルにマッチした未来の街を提案し、コミュニティを再生する社会実験を始めたい。創造都市の魅力を活かし、まちなかにある空き町家や茶室、路地などの都市遺産を活用し、近未来型まちなか居住の提案に結びつけ、また地域コミュニティを醸成するための環境づくりを都市デザインや建築デザインの側面からも研究し、政策提言に結びつけたい

第９期 活動風景

京都の先進地事例「景観まちづくりセンター」の取材

（Ｆグループ）

第９期Ｇグループ

継続的な地域生活交通の確保と生活利便性の向上に関する研究

ディレクター：高山　純一

研究員

・形屋陽一郎　・東　　寛和　・林　　芳史

・稲田　裕介　・中野　達也　・中野　晃太

・片岸　将広　・西山知江子

【募集要項】

近年、公共交通利用者の減少から、まちなかと郊外を結ぶ北陸鉄道浅野川線や石川線の存続問題、郊外バス路線の廃止や減便など、地域生活交通の維持運営が大きな社会問題となってきている。一方、近年では身近な商店・スーパーが廃業・倒産し、高齢者・高校生など、クルマを運転できない交通弱者の日常生活に大きな支障をきたすような状況となっている。本テーマでは、北陸鉄道浅野川線沿線を対象に、地域住民への継続的な公共交通の利用促進の呼び掛けとその効果把握を行うとともに、郊外における生活の利便性向上に向けた方策の検討を行う。

第９期Ｈグループ

中山間地の環境保全、農林業振興を含めた金沢都市圏における循環型社会の形成と自転車でも快適なまちづくり

ディレクター：三国　千秋

研究員

・島崎　淳一　・村中　泰雄　・河村　浩一

・洪　　海林　・竹田　裕治　・谷川　仁弘

・黒川　　敦　・赤須　治郎　・蒋　　萍

・福田　博之　・小中　真道

【募集要項】

中山間地の環境保全と農林業振興は金沢市の環境保全にとっても重要な意味を持っている。本研究では、中山間地の環境、農林業について実態調査を行い、今後の施策提言につなげる。また今年の夏は東日本大震災の影響もあり、省エネの必要性が叫ばれている。本研究では省エネ、省資源（リサイクル）の他、再生可能エネルギー（小水力や木質バイオマスなど）、自転車でも快適に暮らせる金沢の未来像について研究を行う。（各自の関心あるテーマに基づき、分担して研究する。）

ディレクター講座

第７期より、各ディレクターが、通常のグループ活動と別に、全研究員を対象にした教養講座「ディレクター講座」を開催し、グループ間交流を推し進めました。

期	実施日	講師名	題目	参加者
第７期	2009（平成 21）年 10 月 17 日（土）	金沢大学 八重澤美知子	金沢学　～異文化を留学生に教える～	12 名
		金沢美術工芸大学 真鍋淳朗	アートプロジェクト	
	11 月 7 日（土）	金沢大学 川上光彦	交通環境におけるバリアフリーの達成状況と課題	18 名
		金沢大学 高山純一	北陸新幹線金沢開業の効果と課題　～併行在来線問題と開業に向けた地域振興策～	
	11 月 14 日（土）	金沢工業大学 中森勉	石川県の近代化遺産から見えてくるもの	14 名
		北陸大学 三国千秋	環境と哲学　～生き物と生命の視点から～	
	11 月 21 日（土）	金城大学短期大学部 井上克洋	18 世紀のイギリス社会 ～エリザベス救貧法を中心に～	2 名
第８期	2010（平成 22）年 11 月 6 日（土）	金沢工業大学 中森勉	白山麓の世界遺産に向けての研究から	14 名
		金城大学 内慶瑞	地域福祉の今までとこれから	
		金沢美術工芸大学 真鍋淳朗	アートプロジェクト	
	11 月 7 日（日）	金城大学短期大学部 井上克洋	エリザベス救貧法の世界	12 名
		金沢大学 高山純一	防災研究あれこれ（地震時の道路ネットワーク研究から国民保護法まで）	
		北陸大学 三国千秋	「社会的共通資本（宇沢弘文）」とまちづくり	
	11 月 27 日（土）	金沢大学 川上光彦	金沢市のまちづくりの特徴と課題	12 名
		金沢大学 八重澤美知子	女性研究者支援プロジェクト	
第９期	2012（平成 24）年 1 月 21 日（土）	金沢大学 川上光彦	金沢市におけるまちづくりの特徴と課題	20 名
		金城大学 内慶瑞	地域社会と住民福祉活動	
		金沢美術工芸大学 坂本英之	アートを使ったまちづくり	
		金沢大学 高山純一	原発周辺地域を対象とした大規模避難計画策定に関する現状と課題	
	2 月 5 日（日）	金沢工業大学 内田奈芳美	まちづくりファンドとまちづくり支援制度の現状	21 名
		金沢大学 八重澤美知子	留学生と共に地域文化を体験する	
		金城大学短期大学部 井上克洋	茶と世界史	
		北陸大学 三国千秋	ヘーゲル哲学と「社会的共通資本」	

写真でふりかえる活動の軌跡

任命式

8 月に「市民研究員任命式」を開催し、機構長から市民研究員を任命した。
また、任命式にあわせて講演会等を開催することで、市民研究員の研修の機会とした。

機構会議

ディレクターと市民研究員代表者で構成する「機構会議」を定期的に開催し、研究方針・研究内容等運営に関する事項を検討・決定した。

研究成果発表会

活動期間終了後に、各グループの研究成果をパワーポイントで発表する「研究成果発表会」を開催した。

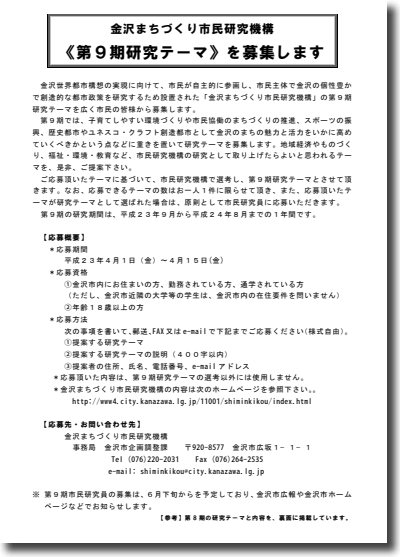
ディレクター講座

各グループの横のつながりを持った研究活動のため、第 7 期よりディレクターによる教養講座を実施した。

資料

■募集要項

■テーマ募集、応募用紙



金沢まちづくり市民研究機構
《第９期研究テーマ》を募集します

金沢世界都市構想の実現に向けて、市民が自主的に参画し、市民主体で金沢の個性豊かで創造的な都市政策を研究するため設置された「金沢まちづくり市民研究機構」の第９期研究テーマを広く市民の皆様から募集します。

第９期では、子育てしやすい環境づくりや市民協働のまちづくりの推進、スポーツの振興、歴史都市やユネスコ・クラフト創造都市として金沢のまちの魅力と活力をいかに高めていくべきかという点などに重きを置いて研究テーマを募集します。地域経済やものづくり、福祉・環境・教育など、市民研究機構の研究として取り上げたらよいと思われるテーマを、是非、ご提案下さい。

ご応募頂いたテーマに基づいて、市民研究機構で選考し、第９期研究テーマとさせて頂きます。なお、応募できるテーマの数は一人１件に限らせて頂き、また、応募頂いたテーマが研究テーマとして選ばれた場合は、原則として市民研究員に応募いただきます。

第９期の研究期間は、平成２３年９月から平成２４年８月までの１年間です。

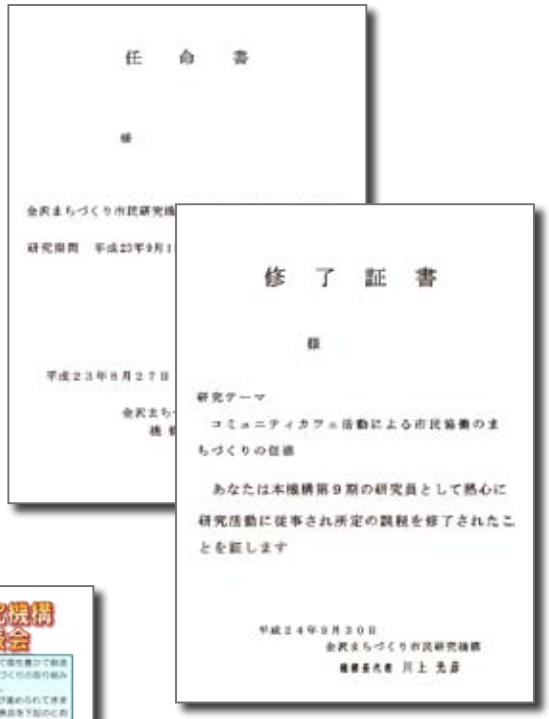
【応募概要】
＊応募期間
平成２３年４月１日（金）～４月１５日(金)
＊応募資格
①金沢市内にお住まいの方、勤務されている方、通学されている方
（ただし、金沢市近隣の大学等の学生は、金沢市内の在住要件を問いません）
②年齢１８歳以上の方
＊応募方法
次の事項を書いて、郵送、FAX又はe-mailで下記までご応募ください(様式自由)。
①提案する研究テーマ
②提案する研究テーマの説明（４００字以内）
③提案者の住所、氏名、電話番号、e-mailアドレス
＊応募頂いた内容は、第９期研究テーマの選考以外には使用しません。
＊金沢まちづくり市民研究機構の内容は次のホームページを参照下さい。
http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11001/shiminkikou/index.html

【応募先・お問い合わせ先】
金沢まちづくり市民研究機構
事務局　金沢市企画調整課　〒920-8577　金沢市広坂１－１－１
Tel (076)220-2031　Fax (076)264-2535
e-mail: shiminkikou@city.kanazawa.lg.jp

※ 第９期市民研究員の募集は、６月下旬からを予定しており、金沢市広報や金沢市ホームページなどでお知らせします。

【参考】第８期の研究テーマと内容を、裏面に掲載しています。

■任命書　修了証書



任　命　書

様

研究期間　平成23年9月1

平成２３年８月２７日

修　了　証　書

様

研究テーマ

コミュニティカフェ活動による市民協働のまちづくりの促進

あなたは本機構第９期の研究員として熱心に研究活動に従事され所定の課程を修了されたことを証します

平成２４年９月３０日
金沢まちづくり市民研究機構
機構長代理　川上 光彦

■研究成果発表会チラシ

市民研究機構の沿革

区分	市民研究機構の沿革	内外情勢
平成 13 年度 （2001 年度）	○「金沢世界都市戦略会議」が 「金沢世界都市戦略への提言」を発表（12 月）	・アメリカ同時多発テロ事件 (9 月) ・東京ディズニーシー誕生 (9 月)
平成 14 年度 （2002 年度）	機構開設のための準備・検討	・日韓ワールドカップ開催 (5,6 月) ・小泉首相北朝鮮訪問 (9 月)
平成 15 年度 （2003 年度）	○「開設準備会」開催（5/19：市役所） ○「市民研究機構設立会議」開催 (6/17：市役所) 小堀氏が機構長に選任、運営方法等決定 ○「市民研究機構開講式」開催（9/6：観光会館） 第 1 期研究開始 【ディレクター】 小堀為雄、川上光彦、水野一郎 佐々木雅幸、飯島泰裕、横山壽一 黒川威人、中川秀昭、三国千秋 （敬称略）	・小惑星探査機はやぶさ打ち上げ (5 月) ・中国で新型肺炎ＳＡＲＳ流行 (3 月頃)
平成 16 年度 （2004 年度）	○第 2 期研究開始 ○第 1 期研究成果発表会 (10/17：文化ホール）	・新潟中越地震発生 (10 月) ・スマトラ島沖地震発生 (12 月) ・愛・地球博開幕 (3 月)
平成 17 年度 （2005 年度）	○第 3 期研究開始 八重澤美知子ディレクター参加 ○第 2 期研究成果発表会 (10/15：文化ホール）	・JR 福知山線脱線事故 (4 月)
平成 18 年度 （2006 年度）	○第 4 期研究開始 ○第 3 期研究成果発表会 (10/22：もてなしドーム地下広場）	・能登半島地震発生（3 月）
平成 19 年度 （2007 年度）	○第 5 期研究開始 中森勉ディレクター、高山純一ディレクター参加 【改正事項】 ①研究テーマの公募 ②市関係課との連携強化 ・研究開始時に、研究テーマに関係する 市の事業概要を情報提供する ③研究員任命期間の制限 ・４期連続所属した研究員の継続禁止 ○第 4 期研究成果発表会 (10/20：もてなしドーム地下広場）	・新潟県中越沖地震発生 (7 月)
平成 20 年度 （2008 年度）	○第 6 期研究開始 ○第 5 期研究成果発表会 (10/4：文化ホール)	・リーマン・ブラザーズ経営破綻 (9 月) ・バラク・オバマ大統領就任 (1 月)
平成 21 年度 （2009 年度）	○第 7 期研究開始 井上克洋ディレクター参加 【改正事項】 ディレクター講座の実施 各グループの横のつながりにむけて、 ディレクターによる教養講座を実施 ○第 6 期研究成果発表会 (10/4：文化ホール）	・民主党政権誕生 (9 月)
平成 22 年度 （2010 年度）	○第 8 期研究開始 内慶瑞ディレクター参加 ○第 7 期研究成果発表会 (9/26：玉川こども図書館） ○山野之義市長誕生	・小惑星探査機はやぶさ地球に帰還 (6 月) ・東日本大震災発生 (3 月) ・九州新幹線鹿児島ルート開業 (3 月)
平成 23 年度 （2011 年度）	○第 9 期研究開始 内田奈芳美ディレクター、 坂本英之ディレクター参加 ○第 8 期研究成果発表会 (10/2：金沢歌劇座）	・ドイツ女子ワールドカップで日本代表優勝 (6,7 月)
平成 24 年度 （2012 年度）	○小堀機構長ご逝去（4 月） ○第 9 期研究成果発表会（9/30：金沢歌劇座）	・ロンドンオリンピック女子柔道で金沢出身の 松本薫選手が金メダルを獲得（8 月）

あとがき

平成１５年９月に、第１期研究が開始されてから、第９期まで延べ６４１名の市民研究員の方による研究活動が行われてきました。１期あたり７０人前後の参加があり、会社員・自営業・公務員・教職員・主婦・学生等様々な職業の方に参加していただきました。平均年齢は４２歳前後と学生さんをはじめとする若い方の参加も多い状況でした。

それぞれに仕事や家庭、勉学との両立を図りながら、研究活動を行うことは、大変負担のかかることです。にもかかわらず、このように多くの研究員の方に参加いただき、非常に熱心で真摯に研究に取り組んでいただいたことからは、市民のまちづくりに対する情熱が伝わってきます。中には継続して参加される方も多くいました。

このように、多くの研究員の方に積極的に参加いただいた理由として、提言が市の施策に生かせるという目標があること、金沢市としても、政策提言の一つ一つに、行政としての真剣な回答を付するということで、市民研究員として研究することの誇り・充実感があること、大学の教授に指導を受けたり、様々な方と共同で研究を行うことにより貴重な自己研鑽の場となること、研究期間終了後の達成感があること等が考えられます。

そして何よりも、熱意を共にする仲間と、まちづくりへの思いをぶつけ合いながら、研究成果をまとめていく時間は、研究員にとって、人生の中でも貴重な経験になったのではないでしょうか。現在では、市民研究機構で出会った仲間同士で、自主的なまちづくり活動を行っている団体も多く存在します。

地方の活力が求められる時代の潮流の中で、魅力ある元気なまちづくりを進めるうえにおいては、行政のみならず、市民の役割が大きいものとなっており、そういう意味で、この市民研究機構は、市民研究員、ディレクター、市と連携をとりながら地道に設置当初の目的に沿うことができていたのだと思います。

市民研究機構の終了後も、金沢市の市民協働の動きが、より発展性のあるものになるよう、地域市民と行政の連携、交流が推進され、金沢の創造的な都市政策が進展することを祈念いたします。

編集委員会

金沢まちづくり市民研究機構
活動記録誌

市民がすすめたまちづくり研究十年の軌跡

編集：「金沢まちづくり市民研究機構活動記録誌」編集委員会
発行：金沢市
〒920-8577 金沢市広坂 1-1-1
TEL.076-220-2031（都市政策局企画調整課）
2013 年 3 月　発行